



TITLE:

京大広報 No. 727

AUTHOR(S):

京都大学企画・情報部広報課

CITATION:

京都大学企画・情報部広報課. 京大広報 No. 727. 京大広報 2017, 727: 4727-4778

ISSUE DATE:

2017-01-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/217952>

RIGHT:

京大 広報

Kyoto University

2017.1
No. 727



※ P4762 参照

目次

[巻頭言]

- 京大ブランドの育成を目指して 4728
総長 山極 壽一

[大学の動き]

- 教育院長等が発令される 4730
- 部局長の交替等 4731
- 名誉教授懇談会を開催 4732
- 『関西経済人・エコノミスト会議』京都大学・大阪大学・
神戸大学 3大学シンポジウムに参加 4732
- 京都大学春秋講義（平成28年度秋季講義）を開催 4733
- 第32回京都賞記念ワークショップ（基礎科学部門）を開催 4734
- 第32回京都賞高校フォーラムを開催 4735
- 第65回京都大学未来フォーラムを開催 4736
- 第66回京都大学未来フォーラムを開催 4737
- 山極壽一 総長が第5回 HeKKSaGOn（日独6大学
コンソーシアム）学長会議に参加 4738
- アウンサンスーチー氏（ミャンマー連邦共和国国家最高顧問）
への名誉博士称号贈呈式および学生との対話会を開催 4739
- ヨアヒム・ガウク ドイツ連邦共和国大統領の本学訪問、
フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト賞の授賞式出席 4741
- 総長主催「外国人研究者との交歓会」を開催 4743
- 11月祭を開催 4744
- 日本学術会議近畿地区会議 学術講演会を開催 4744
- 平成28年度定年退職予定教員 4746

[部局の動き]

- 経営管理研究部・教育部 創立10周年記念講演会・
式典・祝賀会を開催 4749
- 化学研究所創立90周年記念行事を挙行 4751
- 穂高砂防観測所創立50周年記念式典を開催 4752

[寸言]

- 変わるもの、変わらないもの～現代テレビ事情～ 4754
和崎 信哉

[随想]

- タイでの研究立ち上げ 4756
名誉教授 吉川 潔

[洛書]

- マスカンプ 永持 仁 4758

[栄誉]

- 稲葉カヨ 理事・副学長が紫綬褒章を受章 4760
- 斎藤通紀 医学研究科教授が武田医学賞を受賞 4761
- 平成28年度医学教育等関係業務功労者の表彰 4761

[話題]

- 平成28年度総長杯ボウリング大会を開催 4762
- 能楽鑑賞会を開催 4762
- 平成28年度「京都大学体育会スポーツ表彰」授与式を挙行 4763
- 本学学生が平成28年度「京都市スポーツ賞」を受賞 4764
- タイ王国王女が医学研究科を訪問 4764
- 宇治キャンパスで総合防災訓練を実施 4765
- 宇治キャンパスで安全衛生講習会を開催 4766
- 宇治キャンパスでリサイクルフェア・交流会を開催 4766
- 平成28年度桂キャンパス防災訓練および防火訓練を実施 4767
- 第4回花山天文台野外コンサートを開催 4768
- 平成28年度京大関係病院長協議会定例総会を開催 4769
- オープンホスピタル2016を開催 4770
- 大学院総合生存学館（思修館）で第5回国際シンポジウムを開催 4770
- タイ王国で学生短期研修を実施 4772
- 京都大学およびタイ王国マヒドン大学主催「アジア諸国に展開する
地球環境学の教育・研究連携に関する国際シンポジウム」を開催 4773
- 首相夫人 安倍昭恵氏を講師に迎え、特別講義「価値の創造」を開催 4774
- 化学研究所「第116回研究発表会」を開催 4775

[訃報]

- 西原 宏 名誉教授 4777
堀之内 吉成 助教 4778



京都大学

巻頭言

京大ブランドの
育成を目指して

総長 山極 壽一



明けましておめでとうございます。今年の干支は酉（鶏）です。私が長らく暮らしたアフリカのコンゴには、鶏に関する興味深い昔話が伝わっています。

昔、鶏は森の中に住み、猛獣のヒョウも恐れるほど権勢を誇っていました。それは頭に火を燃やしていたからです。しかし、あるときヒョウの子どもが母親と一緒に、昼寝を決め込んでいる鶏にそうっと近づき、頭の炎に触れてみると、なんと冷たい肉ひだの鶏冠ではありませんか。以来、森の動物たちは鶏を恐れなくなり、鶏はヒョウを怖がって人間のもとに身を寄せるようになった、というのです。

この話から、今年は頭に本当の炎を掲げた鶏になって、森の中に分け入ってみようと提案します。野生に戻って、他の動物たちに畏敬の念を抱かせるようになりましょう。京都大学の教職員も学生諸君も、京都大学のブランド力を十二分に発揮して、世界に冠たる大学の価値を示そうではありませんか。

私が総長に任命されて以来2年間余り、国立大学を取り巻く状況は急速に変化しました。学校教育法や国立大学法人法の改正、第3期に向けての国立大学の機能分化と機能強化、それに伴う概算要求と運営費交付金の仕組みの変化、年俸制の促進や卓越研究員事業の導入など、大きな変化が矢継ぎ早に起こり、こういった新しい動きに迅速に対応することが求められています。さらに、高大接続システム改革による高等教育の見直しと入試の改善、産官学共同体制の推進と国際的競争力の強化など、大学の入り口や出口の質保証や教育、研究のより幅広い連携が求められるようになり、大学のガバナンスの強化と組織の構造改革が強く要請される時代になりました。

京都大学はこれらの環境変化や要請にすばやく対応しつつ、自由な学風と創造的な精神を涵養する研究型大学として長期的な視野を持って臨んできました。この2年間に私がWINDOW構想を掲げて推進してきたことはおおむねこの方向に沿ったものであり、執行部が実施してきた事業も順調に成果を挙げています。国からの運営費交付金が毎年削減され、それに伴い教職員の定員削減や予算の縮小が余儀なくされる困難な状況で実施していることを考えると、教職員の皆さんの奮闘ぶりに心から感謝したいと思います。

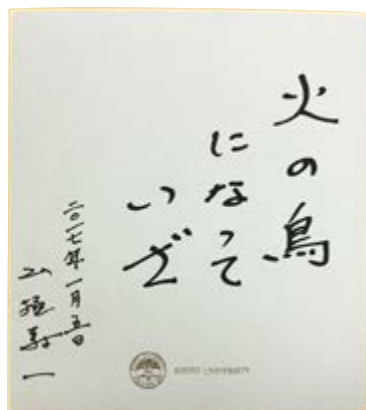
これまで私は総長として京都大学の事業を統括し、みなさんのご意見を伺うとともに、文部科学省や関係省庁、産業界との協議にあたってきました。そういった経験を通じてわかってきたことは、もっと京都大学独自の特色を打ち出し、それを世界へ向けて発信する必要があるということでした。その特色とは京都大学の多様性と独創性で、数々の世界的な賞を受賞してきた研究や京都大学で生まれた新しい学問、日本で最大の数を誇る研究所やセンター群の独創的な研究領域、主としてアジアやアフリカに展開する海外研究拠点などはその好例といえましょう。その魅力を失うことなく、そこに新しい息吹を吹き込み、さらにブランド力をつけて世界に発信することが今京都大学に求められていることだと痛感した次第です。

今後ぜひ早急に実現したいことは、海外のリエゾンオフィスの増設です。現在北米の拠点新設へ向けて動き出していますが、他の拠点についても動きを加速させたいと思っています。また、海外からの留学生や研究者を増やすためには宿舎を充実させることが急務です。現在そのための土地取得が進んでおり、建設のための資金集めに奔走しているところです。

WINDOW構想の中で、私は京都を中心に実施される多様な文化事業や教育研究事業を学術がつなぐ「京都・大学キャンパス構想」や「京都アカデミア構想」を提案してきました。AIやICT社会の到来に対応するためにも芸術系の学問の必要性が高まっています。京都にある芸術系の大学と協力することで、京都大学の独創性をさらに発展させることができるはずです。今後はアートな発想を生かせるような新しい組織を編成しようと考えています。このたび文化庁の京都移転が決まり、今後の文化事業を行政、産業界、教育研究組織が協力して推進していく機運が高まっているので、これらの構想の実現へ向け、京都大学が核となる社会連携事業を企画していきます。

こういった京都大学の新しい動きやブランド力を社会へ発信し、そのコミュニケーションの充実を図るためには広報室を增強し、メディアと協力して京都大学独自の広報戦略を考案していかねばなりません。サイエンス・コミュニケーターやエデュケーターの育成を図る必要もあります。

これからは、京都大学が日本の一大学としてではなく、世界の研究型大学として直接比較される時代です。京都大学がこれまでの世界に冠たる特徴を生かして、どのように飛躍できるかを教職員が一丸となり、学生とともに考えていかねばなりません。そのために、昨年から世界の先端的研究とつなぐ高等研究院をスタートさせ、学生自身が独創的で意欲的な海外経験を企画する「おもろチャレンジ」を開始しました。これから始まる卓越大学院制度や指定国立大学法人制度に向けて、京都大学の良さを発揮できるような仕組みを検討しています。新丸ビルへ移転した東京オフィスも、多面的な大学経営へ向けて好スタートを切っています。海外拠点や海外の大学の学長とも緊密な連携を取りながら、より一層の国際化、多様化、先端化を目指して取り組んでいく所存です。



新執行部として、これまでの2年間は前執行部の立てた計画を引き継ぎ、その継続と新しい可能性について吟味する期間でした。これからの2年間は、その検証を経て京都大学が大きく飛躍する期間だと考えています。ぜひ、教職員のみなさまにご意見やご要望をお寄せいただきたいと思います。予算の逼迫する折、また現在の限られたマンパワーではなかなか実現の難しいこともありますが、できるだけご希望に添えていきたいと思っております。頭にかざした炎によって世界を照らす火の鳥になって、京都大学を前に進めましょう。

[目次に戻る](#)

大学の
動き

教育院長等が発令される

現教育院長等の任期満了に伴い、平成28年10月1日付けで教育院長等が指名されました。

国際高等教育院長



村中 孝史（再任）
任期：平成30年9月30日まで

環境安全保健機構長



大畠 幸一郎（再任）
任期：平成29年3月31日まで

情報環境機構長



喜多 一（新任）
任期：平成30年9月30日まで

図書館機構長および附属図書館長



引原 隆士（再任）
任期：平成30年9月30日まで

産官学連携本部長



阿曾沼 慎司（再任）
任期：平成30年9月30日まで

国際戦略本部長



稲葉 カヨ（再任）
任期：平成30年9月30日まで

大学の
動き

部局長の交替等

(新任)

ウイルス・再生医科学研究所長

開 祐司 ウイルス・再生医科学研究所教授(細胞生物学)が、10月1日付けで選出されました。任期は平成30年3月31日まで。



経済研究所長

溝端佐登史 経済研究所教授(比較経済システム論)が、岡田 章 経済研究所長の後任として、1月1日付けで選出されました。任期は平成30年3月31日まで。



東南アジア地域研究研究所長

河野泰之 東南アジア地域研究研究所教授(土地資源、水資源、生業転換、持続型生存基盤)が、1月1日付けで選出されました。任期は平成30年3月31日まで。



(再任)

医学研究科長・医学部長

上本伸二 医学研究科教授(外科学分野)が、10月1日付けで医学研究科長・医学部長に再任されました。任期は平成29年9月30日まで。

化学研究所長

時任宣博 化学研究所教授(有機元素化学)が、10月1日付けで化学研究所長に再任されました。任期は平成30年3月31日まで。

大学文書館長

伊藤孝夫 法学研究科教授(日本法史)が、10月1日付けで大学文書館長に再任されました。任期は平成30年9月30日まで。

[目次に戻る ↗](#)

大学の
動き

名誉教授懇談会を開催

百周年時計台記念館国際交流ホールにおいて、平成28年11月13日(日)に第89回名誉教授懇談会が開催され、54名の名誉教授の他、総長、理事、部局長等あわせて62名が参加しました。

秋に行われる名誉教授懇談会では、当該年度に名誉教授の称号を授与された教授(文系・理系各1名)による講話会を行うこと

が慣例となっており、文系からは新宮一成 名誉教授(所属部局:人間・環境学研究科)による「夢と神話のほんとうの関係とは?」、理系からは平岡真寛 名誉教授(所属部局:医学研究科)による「医工連携・産学連携による医療機器開発」と題した講演が行われました。

その後の懇談会は、山極壽一 総長による本学の近況を交えた挨拶に続いて、佐藤直樹 理事・副学長による乾杯の発声により始まりました。会場では、出席者それぞれの在職当時の思い出や出来事、近況報告等に話が弾み、盛会のうちに執り行われました。



懇談会の様子



左から、新宮名誉教授、平岡名誉教授、山極総長、佐藤理事・副学長

(総務部(総務課))

[目次に戻る](#)

『関西経済人・エコノミスト会議』 京都大学・大阪大学・神戸大学3大学シンポジウムに参加

「産学連携は進化する～関西発イノベーションへの決意」をテーマにした『『関西経済人・エコノミスト会議』京都大学・大阪大学・神戸大学による3大学シンポジウム』が、平成28年10月24日(月)に開催されました。本シンポジウムは、日本経済新聞社、日本経済研究センターが主催し、京都大学、大阪大学、神戸大学の協力と、池田泉州ホールディングス 池田泉州銀行の特別協力によって行われま



会場の様子

大学の
動き

した。当日は、大阪、神戸、京都の各大学関係者や関西経済人・エコノミスト会議関係者をはじめ、約500名の参加者があり、会場は満席となりました。また、本学からは山極壽一 総長、理事、副学長、監事、理事補、部局長等が出席しました。

シンポジウムでは、川合英雄 日本経済新聞社専務執行役員大阪本社代表によるご挨拶の後、手代木 功 大阪商工会議所副会頭・塩野義製薬社長の産学連携に関する問題提起に続いて、西尾章治郎 大阪大学総長、武田 廣 神戸大学学長、山極総長から各大学の産学連携に対する取組みについてプレゼンテーションが行われました。その後、阪本浩伸 日本経済新聞社常務執行役員大阪本社編集局長をモデレーターとして、手代木副会頭と西尾総長、武田学長、山極総長の4名により、パネルディスカッションが行われ、経済界からは、大学に対し幅広い学内外連携による共同研究体制の構築や窓口設置などの必要性について、一方、大学からは、経済界に対しインターンシップなど大学の教育との連携などが話されました。直接、経済界と



左から、問題提起する手代木副会頭、プレゼンする山極総長、西尾総長、武田学長



パネル討論

大学がそれぞれ想いを伝え、対話できる貴重な場となり、関西地域の特性を活かした産学連携推進の必要性を共有し、盛会のうちに終わりました。

本シンポジウムは、関西の経済界、学界、官界で活躍される方々にお集まりいただきオピニオン形成と交流促進を目的に、産学連携の課題や在り方を整理し、更なるステージへ向けた必要な取組みについて考える機会として開催されたもので、今後もこのような機会に参加し、産官学連携の推進とともに本学のプレゼンス向上に努めていきたいと考えています。

(総務部(渉外課))

[目次に戻る](#)

京都大学春秋講義（平成28年度秋季講義）を開催

京都大学春秋講義は、京都大学における学術研究活動の中で培われてきた知的資源について、広く学内外の人々と共有を図るため、昭和63(1988)年秋から開講している公開講座です。

今回は、メインテーマを「山を知る」として2日間にわたり、合わせて4講義を行いました。1日目の平成28年10月29日(土)は、吉岡崇仁 フィールド科学教育研究センター教授から「『山』は「森」-「森・里・海」のつながり」の物語り、伊勢武史 フィールド科学教育研究センター准教授から「森の生態系と私たちのかかわり-地球温暖化から人のところまで」、2日目の11月3日(木・祝)は、井口正人 防災研究所教授から「火の山の脅威」、小杉賢一朗 農学研究科教授

大学の
動き



吉岡教授



伊勢准教授



井口教授



小杉教授



会場の様子

から「森と水の恵みと土砂災害－山に眠る地下水の実態と活用」と題した講義がありました。2日間で869名の参加があり、各講義には活発な質疑応答が行われ大いに盛り上がりました。

参加者からは、「私たちの身の回りにあるもの、環境を理解するためにいかに科学的知見や分析が有用であるか具体的で分かりやすく伝えていただけた良かった」、「フィールド

の中での研究の魅力をしっかりと伝えていただけた」、「火山が噴火した時にどういう風に火山とつきあったらいいか、火山噴火や火山災害のことについて詳しくわかった」、「岩の中に水を貯えていることに興味が引かれた」などの感想が寄せられました。

(総務部(渉外課))

[目次に戻る](#)

第32回京都賞記念ワークショップ(基礎科学部門)を開催

「免疫分子遺伝学からがん制圧への道」をテーマに、第32回京都賞基礎科学部門の記念ワークショップを平成28年11月12日(土)に百周年時計台記念館において開催しました。当日は、約350名の参加者があり、第32回京都賞受賞者である本庶 佑 客員教授からの基調講演と本研究領域における世界的研究者5名の講演および討論による、がん治療につながる最先端研究の動向を知る貴重な機会となりました。

ワークショップは、湊 長博 理事・副学長の開会挨拶により始まり、続いて、本庶客員教授より「免疫力の再興」と題して、クラススイッチ組換え機構とそこに働くAIDを同定して抗体の機能獲得メカニズムを解明し、PD-1/PD-L1分子の同定と機能解析によって新しいがん免疫療法の道が拓かれた結果、本研究成果が広く医学・生命科学に影響を及ぼすとともに、医療へと展開されていることをデータなどの根拠を基に基調講演を行いました。



湊理事・副学長



本庶客員教授

大学の
動き



村松金沢大学教授



茶本講師



小川教授



ロバート・A・アンダース
ジョンズ・ホプキンス大学
准教授



シドニア・ファガラサン
理化学研究所チームリーダー



集合写真



会場の様子

次に、本研究領域に造詣の深い5名の研究者（村松正道 金沢大学教授，茶本健司 京都大学講師，小川誠司 京都大学教授，ロバート・A・アンダース ジョンズ・ホプキンス大学准教授，シドニア・ファガラサン 理化学研究所 チームリーダー）が，それぞれ，本庶客員教授の抗体の機能性獲得機構の解明ならびに免疫細胞制御分子の発見と医療への展開に関する講演を行いました。各講演後には，湊理事・副学長の進行により，会場からの質問も受け付け，講演者との丁々発止のやりとりが繰り広げられるなど，本研究が人類の福祉に多大な貢献を果たしていることや今後の更なる進展への期待の高さを窺い知る有意義な場となり盛会裏に終わりました。

（総務部（渉外課））

[目次に戻る](#)

第32回京都賞高校フォーラムを開催

平成28年11月14日（月）に百周年時計台記念館において，稲盛財団との共催により，2016年度の京都賞受賞者である本庶佑 客員教授を迎えて，第32回京都賞高校フォーラム「京都賞受賞者を裸にする」を開催しました。

本フォーラムは，同財団が主催する京都賞授賞式および関連行事の期間（京都賞ウィーク）において実施される教育プログラムの一つとして開催され，本学はその一部を同財団と共催しています。

当日は，プロフィール紹介ビデオ上映などの後，本庶客員教授から自身の研究業績について説明がありました。参加した京都府内7つの高校の生徒約400名は，具体的な研究内容の講演を興味深く聴き入っていました。



講演の様子

大学の
動き



本庶客員教授に質問する高校生



生徒からの質問に答える本庶客員教授

講演の後、本学の医学研究科博士課程を修了した近藤 滋 大阪大学生命機能研究科教授の司会により、参加した高校生との質疑応答が行われました。質疑応答では、「あと何年でがんを克服できるか?」「一部のがんにしかオプジーボが適用されていないのはなぜか?」などの研究内容に関する質問だけではなく、「研究者のストレス解消法は?」など研究職に関する質問、さらには「一流とは?」「今までで一番切ない恋は?」などプライベートに関する質問にまでおよび、本庶客員教授の内側に迫るような活発な内容となりました。

最後に、川添信介 理事・副学長が閉会の挨拶を行い、盛会のうちに終了しました。



左から、講演する本庶客員教授、司会をする近藤教授、閉会の挨拶をする川添理事・副学長

(総務部(渉外課))

[目次に戻る](#)

第 65 回京都大学未来フォーラムを開催

第65回京都大学未来フォーラムを平成28年6月16日(木)に開催しました。今回の京都大学未来フォーラムは、法学部卒業生で、元国連事務次長の赤阪清隆 公益財団法人フォーリン・プレスセンター理事長を講師に迎え、百周年時計台記念館において開催しました。



講演する赤阪理事長



会場の様子

大学の
動き

「国際機関で働く」と題した講演の中で赤阪理事長は、まず、グローバルな難題がますます増えるなかで、国連安全保障理事会が十分に機能していない案件も多いことを説明しました。また、これまで日本が行ってきた国際社会への貢献を紹介する一方で、近年、国際機関で働く日本人職員は極端に少なく、特にトップに日本人はいないことに言及しました。そして、自身の体験をもとに、国際機関で働くことはさまざまな問題に取り組む使命感を追求でき、充実したやりがいのある仕事ができることを紹介し、グローバル人材として世界で活躍するため、国際機関を目指してほしいとのメッセージを送りました。

参加者からは、「国際機関で働くことの魅力がよく伝わってくる内容だった」、「日本人として国際問題を見る大切さというものを深く学べた」、「私も何らかの形で世界に貢献したいと思いました」などの感想が寄せられました。

(総務部(渉外課))

[目次に戻る ↗](#)

第66回京都大学未来フォーラムを開催

第66回京都大学未来フォーラムを平成28年12月1日(木)に開催しました。今回の京都大学未来フォーラムは、法学部卒業生の村尾和俊 西日本電信電話株式会社代表取締役社長を講師に迎え、百周年時計台記念館において開催しました。

「激変する情報通信市場と新たなチャレンジ」と題した講演の中で村尾代表取締役社長は、「トンソー・もしもし」から始まったわが国の情報通信の歴史や、通信技術に関する豆知識について、資料を紹介しながらわかりやすく説明しました。そして、NTTが民営化による競争導入や技術革新によるサービスの多様化、料金の低廉化、市場の拡大の歴史を経て、現在では観光、教育、健康・福祉、農業など、さまざまなものにICT(情報通信技術)を関連付けて、便利で豊かで安全な社会作りに貢献する企業に大きく変わろうとしていると語りました。

参加者からは、「電電公社からのNTTの脱皮の変遷をたどることができて、とても勉強になった」、「ICTの活用でモノとモノがつながり、生活が豊かになる新しいビジネスはとても革新的で今後の社会に多くの利益をもたらすと感じました」、「外国人観光客や医療、離島での活用などICTは多岐にわたって活用できるものだと思った」などの感想が寄せられました。



会場の様子



講演する村尾代表取締役社長

(総務部(渉外課))

[目次に戻る ↗](#)

大学
の
動き山極壽一総長が第5回 HeKKSaGOn
(日独6大学コンソーシアム) 学長会議に参加

第5回 HeKKSaGOn(ヘキサゴン)学長会議が平成28年9月29日(木)～30日(金)にドイツ・カールスルーエ工科大学で開催され、山極壽一総長、稲葉カヨ 理事・副学長をはじめ、本学教職員19名および学生3名が参加しました。HeKKSaGOnは、ドイツのハイデルベルク大学、ゲッチンゲン大学、カールスルーエ工科大学、日本の京都大学、東北大学、大阪大学の6大学からなる日独の大学間国際ネットワークで、今回のテーマは、「Fostering Student Mobility to shape tomorrow's Researchers and Innovators」で、約170名の参加者が集まりました。

初日の全体会議は、Holger Hanselka カールスルーエ工科大学長による開会の挨拶で開幕し、Wolfram Jäger カールスルーエ第一市長、里見 進 東北大学総長、柳 秀直 在ミュンヘン総領事からの挨拶、ドイツ学術交流会(DAAD)のHolger Finken氏、日本学術振興会(JSPS)の小平桂一 ボン研究連絡センター長、ドイツ研究振興協会(DFG)のFranziska Langer氏からそれぞれの助成事業の紹介の後、カールスルーエ工科大学の卒業生で自身が起業したlengoo GmbH社のChristopher Kränzler社長から「Going abroad – Founding at home. International Experience as an asset for start-up entrepreneurs」をテーマに基調講演があり、自身の留学経験をユーモアを交えて話されました。



山極総長による講演

引き続き、HeKKSaGOnの枠組みの中で活動している8つの研究分野のワーキンググループから、これまでの活動報告があり、個別ワークショップの実施や共著論文の執筆など、活発に交流が行われている様子が伺えました。初日のプログラムを締めくくったのは、6学長による各大学の学生交流をテーマにした講演で、各大学の理念や実績、ユニークな取り組みなどが披露されました。

2日目の午前、学長および副学長による学長会議においてHeKKSaGOnの今後のあり方について集中した議論が行われ、改めてHeKKSaGOnのミッションも確認されました。並行して、今回から新しく加わったData Scienceの分野も加えた9つの分野の研究セッションが行われる一方、今回初めての試みとして、「Bridging Cultures through Mobility in Research, Higher Education and Innovation」をテーマに学生ワークショップも開催されました。午後の全体会議では、それぞれの報告が行われ、学生たちは学長を前に緊張した面持ちを見せながら、話し合いの成果をしっかりと発表し、bridging culturesの文字通り、文化をまたいで連帯が生まれた様子でした。

最後に、6大学学長が、次回学長会議までにワーキンググループのあり方を検討するとともに、今後はこのネットワークの枠組みで研究交流だけでなく学生交流や教育交流も進め、



会場の様子

大学の
動き

HeKKSaGOnのプレゼンスを上げる活動にも力を入れることを記した共同声明書に署名し、会議は盛会のうちに終了しました。

次回は平成30(2018)年4月12日～13日に大阪大学で開催される予定です。



左から, Bernhard Eitel ハイデルベルク大学長, 山極総長, Holger Hanselka カールスルーエ工科大学長, 里見東北大学総長, Ulrike Beisiegel ゲッチングン大学長, 西尾章治郎大阪大学総長

※ HeKKSaGOn (ヘキサゴン) とは

平成22(2010)年, 日本側から京都大学, 東北大学, 大阪大学, ドイツ側からハイデルベルク大学, ゲッチングン大学, カールスルーエ工科大学の計6大学が, 両国の科学と知識の進歩向上を目指す学術交流を目的として設立したもので, 6大学が所在する都市 (Heidelberg, Kyoto, Karlsruhe, Sendai, Göttingen, Osaka) の頭文字等を取ってHeKKSaGOnと命名されました。主な活動として, 日独6大学学長会議, 研究セッション, 博士課程学生サマースクール等を開催しています。本学は日本側幹事校として, ドイツ側幹事校ハイデルベルク大学との調整役を務めています。

【関連リンク】

HeKKSaGOn

<http://www.hekksagon.net/>

Kyoto University: Global Engagement「HeKKSaGOn」

<http://www.oc.kyoto-u.ac.jp/network/hekksagon/>

(企画・情報部(国際交流課))

[目次に戻る ↗](#)

アウンサンスーチー氏(ミャンマー連邦共和国国家最高顧問)への名誉博士称号贈呈式および学生との対話会を開催

平成28年11月3日(木), 京都大学稲盛財団記念館において, 山極壽一 総長, 理事・副学長, 研究科長, ミャンマー政府, 外務省, 文部科学省等関係者出席の下, アウンサンスーチー氏(ミャンマー連邦共和国国家最高顧問)への京都大学名誉博士称号贈呈式が挙行されました。学術文化の礎ともいえる自由と民主主義の世界的発展に多大な功績のあったアウンサンスーチー氏

大学の
動き

に対し、本学において顕彰することが適当と認め、名誉博士の称号贈呈を決定したものです。名誉博士の授与は同氏で14人目となりますが、今回はじめて、自由や民主主義といった普遍的な価値の発展に尽力した個人への授与となりました。

贈呈式では、アウンサンスーチー氏に対し、山極総長から名誉博士記および称号贈呈の趣意書ならびに名誉博士称号の証となるカラーコードが贈呈されました。アウンサンスーチー氏は贈呈後にスピーチを行い、その冒頭で日本語を披露され、また、京都にお住まいの頃の思い出とともに名誉博士授与への感謝の意を述べられました。

贈呈式終了後、同氏と本学学生との対話会が行われました。国際政治に関連する、または、ミャンマーとの交流が深い学部・研究科から推薦を受けた学生8名が登壇し、それぞれの質問に、同氏が答えるかたちで対話会は進められました。氏は、学生からのさまざまな質問にひとつひとつ真摯にお答えになり、学生たちも深く感銘を受けた様子でした。約150名の参加者も熱心に聴き入り、ときに笑いが会場をつつむ和やかな会となりました。

学生との対話会終了後、河野泰之 東南アジア研究所長の案内で、アウンサンスーチー氏は同研究所東棟にある同氏ゆかりの品々を展示している「アウンサンスーチー・ルーム」を約3年半ぶりに訪問されました。



山極総長による式辞



挨拶をするアウンサンスーチー氏



学生からの質問に答えるアウンサンスーチー氏



質問する学生



集合写真

大学の
動き

【関連リンク】

京都大学名誉博士

http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/about/history/honorary_doctor.html

アウンサンスーチー氏（ミャンマー連邦共和国国家最高顧問）名誉博士称号贈呈式および学生との対話（京都大学 Open Course Ware）

<http://ocw.kyoto-u.ac.jp/ja/international-conference/59>

アウンサンスーチー・ルーム

<http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/about/campus/photo/list/yakugakubu.html>

アウン・サン・スー・チー ミャンマー国民民主連盟議長の講演会を開催しました。（2013年4月15日）

http://www.kyoto-u.ac.jp/static/ja/news_data/h/h1/news7/2013/130415_1.htm

（企画・情報部（国際交流課））

[目次に戻る](#)

ヨアヒム・ガウク ドイツ連邦共和国大統領の本学訪問、 フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト賞の授賞式出席

ヨアヒム・ガウク ドイツ連邦共和国大統領が来日され、東京、京都、長崎という日程の中で、平成28年11月17日（木）に本学を訪問されました。

最初に、山極壽一 総長，稲葉カヨ 理事・副学長，北野正雄 理事・副学長，三橋 紫 国際戦略本部副本部長と、両国の学術交流や文化について懇談されたのち、本学を中心とする関西の学生・若手研究者16名とのドイツ語での懇談会に参加されました。ドイツ国民に人気のある大統領が、自由に生き生きとした会話を持とうと希望されたとおり、民主主義や女性の活躍機会など、様々なテーマでの活発なディスカッションが和やかな雰囲気の中で行われました。

今回の本学訪問のもう一つの目的は、アレクサンダー・フォン・フンボルト財団主催のフィリップ・フランツ・フォン・シーボルト賞の授賞式に出席することでした。本賞は、ドイツと日本の文化・社会のよりよい相互理解に特別に貢献し、学問上すぐれた業績をあげている日本の研究者1名に授与される賞です。例年、ベルリンの連邦大統領官邸ベルビュー宮殿にて行われるこの授賞



ガウク大統領と山極総長



迎賓室での懇談



学生・若手研究者との懇談会（中央テーブルを挟んで、大統領と、パートナーのシャート女史）

大学の
動き

式を、今回の大統領の来日にあわせて京都大学にて行う、という光栄な機会をいただきました。

授与式では、山極総長は挨拶の中で、ドイツのハイデルベルク大学内に開設した本学の欧州拠点ハイデルベルクオフィスや、本学構内に開設したハイデルベルク大学京都オフィスを研究・教育支援を行っていること、また、HeKKSaGOn（ヘキサゴン）と名付けた日独6大学ネットワークで両国の連携強化を図っていることなど、本学にて授賞式を行うご縁をいただいたドイツとの交流の深さを紹介するとともに、ガウク大統領、アレクサンダー・フォン・フンボルト財団の学術交流推進に対する理解と支援に感謝の意を表しました。

ガウク大統領のご挨拶では、ドイツ生まれのアインシュタイン博士が日本を讃えた言葉や、本学の過去の実績者についても述べられ、ドイツと日本で培ってきた学術の絆が今後の交流推進で一層強められ、よりよい結果が生み出されることを望むと結ばれました。続いて、大統領とヘルムート・シュヴァルツ アレクサンダー・フォン・フンボルト財団理事長から、今年度の受賞者である河崎 健 上智大学教授へ賞状の授与が行われ、日独両国の出席者約110名が今後一層の交流発展の思いを強める機会となりました。

【関連リンク】

京都大学欧州拠点

<http://www.oc.kyoto-u.ac.jp/overseas-centers/eu/HeKKSaGOn>

<http://www.hekksagon.net/>

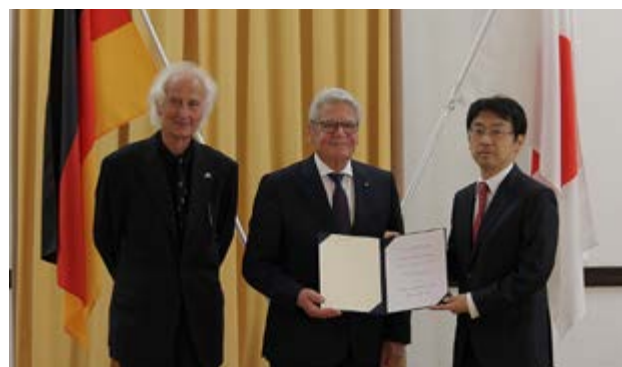
Kyoto University: Global Engagement「HeKKSaGOn」

<http://www.oc.kyoto-u.ac.jp/network/hekksagon/>
フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト賞

http://tokyo.daad.de/wp/scholarship_siebold/



シーボルト賞授賞式の様子



今年度シーボルト賞受賞者 河崎教授への賞状授与（左から、シュヴァルツ理事長、ガウク大統領、河崎教授）



山極総長による挨拶



ガウク大統領の挨拶

（企画・情報部（国際交流課））

[目次に戻る](#)

大学の
動き

総長主催「外国人研究者との交歓会」を開催

百周年時計台記念館・国際交流ホールにおいて、平成28年11月29日（火）に総長主催「外国人研究者との交歓会」を開催しました。これは恒例の国際交流イベントとして毎年開催しているもので、本学で教育・研究に携わっている外国人研究者、総長・理事等役員および部局長をはじめ、外国人研究者と関わりのある本学教職員が、互いの交流を深めることを目的としています。今回は、研究科・研究所・センター等合わせて約45部局から、270名を超える参加がありました。



交歓会の様子

交歓会は、三橋 紫 国際戦略本部副本部長の司会・進行によって始まりました。山極壽一 総長の開会挨拶では、創造性を涵養する本学の伝統的な教育・研究環境をこれからも保っていくために、世界中の様々な言語・概念について闊達な意見交換を望むことなどが述べられ、会場は一体感に包まれました。続いて湊 長博 理事・副学長の乾杯の発声の後には、参加者それぞれの研究内容などをテーマに会場内に談笑の輪が広がりました。昨年度に引き続き、子どもを持つ研究者のために託児室を設けたことにより、夫婦や家族での参加がしやすくなり、交流もより一層広がりのあるものになりました。また、会の途中には、本学能楽部狂言会の学生達により、狂言「呼声」が披露され、懇談に華を添えました。

約2時間の交歓会は、稲葉カヨ 理事・副学長の挨拶により締めくくられ、パーティーの余韻を残しつつ、閉会となりました。



三橋国際戦略本部副本部長による 山極総長による開会の挨拶
司会進行



湊理事・副学長による乾杯



能楽部狂言会による狂言「呼声」



稲葉理事・副学長による閉会の挨拶

（企画・情報部（国際交流課）

[目次に戻る](#)

大学の
動き

11 月祭を開催

第58回目となる11月祭が平成28年11月19日(土)～22日(火)に開催されました。

キャンパス内は100店舗以上の模擬店が出展し、おまつり広場特設ステージ(吉田南グラウンド)では音楽ライブやダンスパフォーマンスなどさまざまな催しが行われました。好天に恵まれたこともあり、学生のみならず、家族連れや中高生など多くの人でにぎわいました。

最終日にはおまつり広場でフィナーレのファイヤーが焚かれ、4日間にわたる祭典の幕を閉じました。



(写真上) 吉田南構内の様子
(写真左上) 模擬店の様子
(写真左下) フィナーレのファイヤー

(教育推進・学生支援部(厚生課))

[目次に戻る ↗](#)

日本学術会議近畿地区会議 学術講演会を開催

国際科学イノベーション棟において、平成28年10月15日(土)に、日本学術会議近畿地区会議と京都大学は、地域社会の学術の振興に寄与することを目的として、日本学術会議近畿地区会議 学術講演会「アフリカの進化と文化ーわれわれがアフリカから学ぶことー」を開催しました。

梶 茂樹 日本学術会議近畿地区会議代表幹事および大西 隆 日本学術会議会長の挨拶



左から、挨拶する大西会長、趣旨説明をする梶代表幹事、総合司会の伊藤教授

大学の
動き

の後、梶代表幹事より「自然と文化の両面からアフリカの多様性とすばらしさ、その学問的研究の奥深さを市民の方々と共有する」との本講演会の趣旨説明が行われました。

続いて、山極壽一 総長が「ゴリラから学んだ人類の進化」、幸田正典 大阪市立大学教授が「アフリカの魚から学ぶ動物の社会と賢さの進化」、宮本正興 大阪外国語大学名誉教授が「20世紀アフリカ文学の伝統」、中村香子 アフリカ地域研究資料センター研究員が「『伝統衣装』のいまーケニア牧畜民のビーズ装飾を事例にー」と題して講演を行い、多様な視点からアフリカのフィールドワーク等に基づく研究成果を披露しました。



ゴリラのフィールド調査について解説する山極総長 講演会場の様子

講演後は、講演者全員による全体討論において参加者からの質問に答え、会場はおおいに盛り上がりました。その後、伊藤公雄 文学研究科教授が閉会の挨拶を行い、盛況のうちに終了しました。

本講演会には学内外から約120名の参加があり、終了後のアンケートでは「遠い存在だったアフリカが身近に感じられた」「アフリカのことを更に知りたくなった」「発表者それぞれの視点がとても面白いと思った」などの感想が寄せられました。



全体討論の様子（左から山極総長、幸田教授）



全体討論の様子（左から宮本名誉教授、中村研究員）

（研究推進部（研究推進課））

[目次に戻る](#)

大学の
動き

平成 28 年度定年退職予定教員

京都大学教員定年規程により、教員56名（教授51名、助教5名）が本年3月31日付けで退職の予定です。

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
文学研究科	大 谷 雅 夫	文献文化学専攻 東洋文献文化学講座	和漢比較文学に関する研究
	杉 山 正 明	歴史文化学専攻 歴史文化学講座	モンゴル帝国とその時代に関する研究
	伊 藤 公 雄	行動文化学専攻 行動文化学講座	日常生活も視野に入れた政治現象をめぐり文化社会学・メディア社会学的研究
教育学研究科	田 中 耕 治	教育科学専攻 教育方法学講座	アメリカにおける教育評価論の史的展開に関する研究
	高 見 茂	教育科学専攻 比較教育政策学講座	教育資源配分と公共政策に関する研究
経済学研究科	堀 和 生	経済学専攻 歴史・思想分析講座	東アジア経済史の研究、東アジアにおける資本主義の発展に関する研究
	植 田 和 弘	経済学専攻 金融・財政講座	環境政策（金属・廃棄物とリサイクル、温暖化、エネルギー）の経済学、地方財政、持続可能な発展理論の研究
理学研究科	上 田 哲 生	数学・数理解析専攻 解析学講座	多変数複素関数論および高次元複素力学系に関する研究
	富 田 良 雄	物理学・宇宙物理学専攻 宇宙物理学講座	星間物質の観測的研究
	七 田 芳 則	生物科学専攻 高次情報形成学講座	動物の視覚・光受容機構の生物物理学的・分子生理学的研究
医学研究科	我部山 キヨ子	人間健康科学系専攻 家族看護学講座	助産診断可視下技法の次世代型トレーニング法の開発、高度生殖補助医療者への支援プログラムの構築、助産学
薬学研究科	橋 田 充	薬学専攻 薬品動態医療薬学講座	薬剤学、製剤学、薬物動態学、薬物動態制御学に関する研究
	佐 治 英 郎	薬学専攻 病態機能解析学講座	生体分子イメージングに関する研究
工学研究科	朝 倉 俊 弘	社会基盤工学専攻 資源工学講座	トンネル・地下空洞の設計・施工・計測の合理化に関する研究 トンネルの地震対策、維持管理に関する研究
	古 阪 秀 三	建築学専攻 建築生産工学講座	建築生産システムの研究 プロジェクトマネジメント／コンストラクションマネジメントの研究
	高 田 光 雄	建築学専攻 居住空間学講座	住まい・まちづくりの実践的研究、ならびに、社会的建築計画に関する研究
	高 橋 大 武	建築学専攻 環境構成学講座	建築音響に関する研究
	立 花 明 知	マイクロエンジニアリング専攻 ナノサイエンス講座	量子電磁力学の応用に関する理論的研究
	福 山 淳	原子核工学専攻 核エネルギー工学講座	核融合プラズマの統合モデリングとシミュレーションに関する研究

大学の
動き

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
工 学 研 究 科	酒 井 明	材料工学専攻 先端材料物性学講座	単原子接点の高バイアス安定性の研究 単分子接合の電子伝導の研究 HCP 金属の単原子接点形成の研究
	辻 博 司	電子工学専攻 電子物理工学講座	負イオンビーム工学に関する研究
	平 尾 一 之	材料化学専攻 無機材料化学講座	無機固体材料を中心とした、新素材の開発やグリーンイノベーションへの貢献を目指した研究
	赤 木 和 夫	高分子化学専攻 高分子合成講座	電子・光機能性高分子の合成と性質に関する研究
	澤 本 光 男	高分子化学専攻 高分子合成講座	高分子化学および高分子合成、とくに精密重合の開拓と機能性高分子の精密合成に関する研究
	田 門 肇	化学工学専攻 化学システム工学講座	物質の高効率分離・精製を目指した分離材および分離場の開発に関する研究
農 学 研 究 科	福 井 昌 夫	応用生物学専攻 植物保護科学講座	害虫防除を標的とした昆虫一般の化学的、音響的交信の生理学的研究
	天 野 洋	地域環境科学専攻 生産生態科学講座	天敵カブリダニ類の生態と利用に関する研究 持続的な害虫管理法の確立に関する研究
	新 山 陽 子	生物資源経済学専攻 農企業経営情報学講座	農業の企業形態、フードシステムの国際比較、リスク認知・リスクコミュニケーション、食農倫理に関する研究
	安 達 修 二	食品生物学専攻 食品生産工学講座	食品製造プロセスの設計・運転に関する食品工学的研究
人 間 ・ 環 境 学 科 研 究 科	杉 万 俊 夫	共生人間学専攻 人間社会論講座	グループ・ダイナミックスに関する研究
	富 田 恭 彦	共生人間学専攻 思想文化論講座	科学哲学／言語哲学／西洋精神史、とりわけ西洋近代観念説の自然主義的論理空間とその変質過程に関する研究
	東 郷 雄 二	共生人間学専攻 言語科学講座	冠詞、指示詞、動詞時制を中心とする意味論・語用論研究
	前 川 玲 子	共生文明学専攻 現代文明論講座	人文・社会科学に属する研究 20世紀アメリカの知識人研究
	稲 垣 直 樹	共生文明学専攻 比較文明論講座	近現代フランス文学・文化社会、日仏比較文学・比較文化に関する研究
	阿 辻 哲 次	共生文明学専攻 歴史文化社会論講座	中国を中心とする東アジア地域における文字文化史の研究
	西 山 良 平	共生文明学専攻 歴史文化社会論講座	日本古代・中世の社会史・文化史
エ ネ ル ギ ー 科 学 研 究 科	坂 志 朗	エネルギー社会・環境科学専攻 社会エネルギー科学講座	種々のバイオマスからのバイオエネルギー、特にバイオディーゼルおよびバイオエタノールの創製に関する研究
	塩 路 昌 宏	エネルギー変換科学専攻 エネルギー変換システム学講座	熱流体工学と燃焼・動力システムに関する研究

大学の
動き

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
情報学研究科	田 中 克 己	社会情報学専攻 社会情報モデル講座	情報検索及びデータベースに関する研究
	船 越 満 明	複雑系科学専攻 非線形物理学講座	流体系等での非線形挙動に関する研究
	高 橋 豊	システム科学専攻 システム情報論講座	情報システムの解析・構成・評価理論に関する研究
総合生存学館	大 石 眞	総合生存学専攻 総合生存学講座	憲法学，とくに議会制度・宗教制度の比較法史的分析と日本憲法史に関する研究
公共政策連携 研 究 部	翁 邦 雄	公共政策第二講座	金融政策および日本経済に関する研究
人文科学研究所	大 浦 康 介	文化生成研究部門	文学・表象理論，フランス文学に関する研究
	冨 谷 至	文化構成研究部門	中国法制史・簡牘学の研究
	山 室 信 一	文化連関研究部門	戦争と平和をめぐる法政思想の連鎖研究
ウイルス・再生 医 学 研 究 所	都賀谷 紀 宏	生命システム研究部門	歯科材料・生体材料に関する研究 歯科医療の社会学的研究
	村 上 昭	生命システム研究部門	増殖・分化因子 Egf3 が胚発生初期に果たす役割の解析
防 災 研 究 所	中 島 正 愛	地震防災研究部門	建築構造物の耐震解析・設計の高度化と都市の地震災害軽減に資する研究
	井 合 進	地盤災害研究部門	地震時の地盤災害の機構解明と地盤防災への応用に関する研究
原子炉実験所	藤 井 紀 子	放射線生命科学研究部門	老化によって生じる蛋白質中の D-アミノ酸の増加と蛋白質の構造変化，異常凝集化，機能変化に関する研究
霊長類研究所	BERCOVITCH, Fred Bruce	附属国際共同先端研究センター	社会生態に関する研究
東南アジア地域 研 究 研 究 所	清 水 展	相関地域研究部門	文化人類学。自然災害からの創造的復興過程の研究。アメリカ支配下の戦後日本と近代フィリピンの比較研究。
生 態 学 研 究 セ ン タ ー	大 串 隆 之	生態学研究部門	進化－生態フィードバックに関する研究
こころの未来 研究センター	BECKER, Carl Bradley		日本人の死生観に基づく医療倫理と環境倫理を含む生命倫理学に関する研究
物質－細胞統合 システム拠点	北 川 進		錯体化学，特に配位結合を用いる多孔性材料の合成化学とその気体物質の貯蔵，分離，精製などへの応用の研究

[目次に戻る](#)



経営管理研究部・教育部 創立 10 周年記念講演会・式典・祝賀会を開催

平成 18 年 4 月に創立された経営管理研究部・教育部は平成 28 年 4 月 1 日に 10 周年を迎えました。これを記念し、10 月 22 日(土)に百周年時計台記念館において、学内外の約 400 名の参加を得て、記念講演会・式典・祝賀会を開催しました。

記念講演会では、アナリー・サクセニアン カリフォルニア大学バークレー校スクール・オブ・インフォメーション学部長・教授より、「次世代に向けた高度専門職業人・経営管理人材の教育」と題して基調講演が行われました。本講演では「これからのビジネススクールはこれまでのそれとは異なり、デザイン思考、学際的問題解決、チームワーク、経験学習とリフレクション、倫理と価値という 5 つの専門性を重視するべきだ」と話されました。

つぎに、南場智子 株式会社ディー・エヌ・エー取締役会長より、自らの起業体験をもとに「京大ビジネススクールを私が好きにして良いと言われたら」と題して特別講演が行われました。本講演では「コンサルタントの経験やビジネススクールでの学びは必ずしも起業では通用しなかった。だから自らビジネスを実行するというを中心にすえた、起業ベースの大学院をつくりたい」と提起されました。

続いて、小林潔司 経営管理研究部・教育部教授により、「文理融合型ビジネススクールの発展をめざして」と題して特別報告があり、「学問の文理融合はとても難しいが、ビジネス教育は文理融合なしにはありえない」と話されました。

記念講演会の最後に卒業生 3 名による特別セッションがあり、赤坂美保氏(5 期生)から「グローバル M&A の仕事での活躍と育休ママが学ぶ MBA 講座の展開について」、小間裕康氏(4 期生)から「電気自動車メーカー GLM の起業経営について」、ソボダチョイ氏(1 期生)から「P&G を経てエモーション、健康をキーにした起業独立について」の報告がありました。

記念講演会は、まさしく「起業」が未来をつくるという強いメッセージを来聴者に訴えるものとなりました。



左から、サクセニアン先生、南場会長、小林先生

記念式典は京都大学交響楽団の弦楽四重奏による、ハイドンの「日の出」、エルガーの「愛の挨拶」の演奏で始まりました。若林靖永 経営管理研究部長・教育部長の開式の辞のあと、まず、阿曾沼慎司 理事より、産官学連携における本大学院の展開について触れられ、大学としての祝辞を述べられました。幸田博人 みずほ証券株式会社代表取締役副社長は、「寄附講座を通じて本大学院と連携して、さまざまな有意義な教育プログラムの開発等に取り組んできたこと」、浅野敦行 文部科学省高等教育局専門教育課長は、「専門職大学院制度の意義につ

部局の
動き

いて触れ、本大学院が経営分野の専門職大学院として大きな成果を上げていること」、伊藤文雄 一般社団法人 ABEST21 理事長は、「同法人がすすめる経営分野専門職大学院の認証評価の仕組みについて触れ、本大学院の審査結果が2校しかないA評価であること」、山田啓二 京都府知事の代理として山内修一 副知事が「京都府下での観光、道路等公共インフラの管理などについて本大学院と連携した取り組みが進められていること」について、祝辞を述べられました。



左から、阿曾沼理事、幸田みずほ証券副社長、浅野文科省課長



左から、伊藤 ABEST21 理事長、山内副知事、門川市長

記念式典終了後、祝賀会が開催され、まず門川大作 京都市長より、中小企業の多い京都における、中小企業の経営改善につながる活躍を期待したいという祝辞がありました。吉田和男 初代経営管理研究部長・教育部長の乾杯の挨拶の後、成生達彦 経営管理研究部・教育部教授（第2代研究部長）、小林教授（第3代）、徳賀芳弘 経営管理研究部・教育部教授（第4代）、河野広隆 経営管理研究部・教育部教授（第5代）と歴代研究部長・教育部長からの挨拶がありました。続いて、港湾寄附講座の、鬼頭平三 一般社団法人みなと総合研究財団理事長の代理で山縣宣彦 同理事、本事業の共催団体でもある一般社団法人京都ビジネスリサーチセンターの平尾良昭事務局長の祝辞がありました。最後に、当日午前で開催された経営管理大学院同窓会総会で会長に選出された大森 充氏の祝辞の後、修了生10名により一人1分1枚スライドというショートプレゼンテーションが行われました。祝賀会では、本部局と関わりのある自治体・企業・団体等の代表、本部局に在籍した教職員、修了生と現役院生が集い、熱心に歓談する場となりました。最後に戸田圭一 経営管理副研究部長の閉会の挨拶で本記念事業は終了しました。



講演者および来賓

(大学院経営管理研究部・教育部)

[目次に戻る](#)

化学研究所創立 90 周年記念行事を挙行

大正 15 (1926) 年 10 月 4 日に設置され、平成 28 年秋に、創立 90 周年を迎えた化学研究所は、記念講演会・式典・展示会および祝賀会を 11 月 11 日 (金) に京都大学百周年時計台記念館・百周年記念ホールにおいて挙行了しました。

記念行事当日の午前中から、時計台記念館 2 階の国際交流ホールにて、現在の化学研究所を紹介する展示会を行いました。研究所組織を成す 5 つの研究系と 3 つの研究センターならびに、これらを構成する 30 研究領域の各研究内容について、ポスターや展示物、モニターなどで紹介しました。室内壁面では、同研究所を紹介する映像なども上映され、閲覧客の足を止めていました。午後からは 1 階の記念ホールにて、記念講演会を開催しました。時任宣博化学研究所長による化学研究所の過去、現在、未来に関する総括講演に続き、近年特に注目される教授陣である、緒方博之 教授、島川祐一 教授、阪部周二 教授、山子 茂 教授らによる 4 件の学術講演が披露されました。

記念式典では、時任所長の式辞に続いて、山極壽一 総長、小松弥生 文部科学省研究振興局長、松浦善治 国立大学附置研究所・センター長会議会長 (代理・佐々木節 国立大学附置



記念展示会



記念講演会での時任所長の講演

部局の
動き

研究所・センター長会議第一部会長), 山本 尚 日本化学会会長からそれぞれ祝辞が述べられました。

記念講演会・式典には, 官学会・産業界から200名を越える参加者を得て, 一般参加, 所内参加を合わせて, 500席が満席となる盛況ぶりでした。記念祝賀会も, 国際交流ホールに約300名を超える参加者を得て, 盛会のうちに終了しました。



記念式典での山極総長の挨拶



記念式典での小松文部科学省研究振興局長の挨拶



記念祝賀会



来賓および名誉教授, 教授

(化学研究所)

[目次に戻る](#)

穂高砂防観測所創立 50 周年記念式典を開催

防災研究所附属流域災害研究センター穂高砂防観測所が昭和42(1967)年の創立から50周年を迎えたのを機に, 平成28年10月17日(月), 雨混じりの天気の中で, 同観測所からは



岩館知哉 国土交通省神通川水系砂防事務所長からの祝辞



同観測所の頻回利用者ランキング発表・表彰



寶 馨 防災研究所長から出席者への「お礼の言葉」

部局の
動き

ど近い中尾公民館（岐阜県高山市）にて同観測所の創立50周年式典を開催しました。

同観測所は、岐阜県と長野県の県境に位置する活火山・焼岳のふもとに位置し、土砂災害の防止・軽減を目的として、山岳流域における土砂流出の実態を明らかにすることを目指して様々な観測を行ってきました。

式典では、國島芳明 高山市長をはじめとする来賓の方々から祝辞をいただくとともに、同観測所敷地の地権者の方々へこの50年間にわたるお力添えについて感謝状を贈呈しました。また、同観測所に勤務する堤 大三 防災研究所附属流域災害研究センター准教授から「観測所の歩み」としてこの50年間の沿革についての紹介を行いました。

続いての記念祝賀会では、共同利用・共同研究施設として同観測所を利用している所外・学外の研究者および地域の方々から多数の出席があり、50年にわたる観測活動の思い出話に花が咲きました。また、同観測所の頻回利用者ランキングを発表し、最多利用賞を正岡直也 農学研究科特定助教（154日利用）に贈呈しました。



出席者一同

（防災研究所）

[目次に戻る ↗](#)

寸言

変わるもの、変わらないもの
～現代テレビ事情～

和崎 信哉



今テレビを取り巻く環境が大きく変わろうとしています。私が公共放送NHKと有料衛星放送WOWOWとでテレビに関わって半世紀近くになりますが、テレビというのは技術革新の上に成り立つ文化と言ってよいでしょう。

現場のディレクター、プロデューサーとして30年近く直接番組制作に携わってきましたが、最初はモノクロフィルムからスタートし、それがカラーになり、そのフィルムがVTRに、さらに地上波放送だけではなく衛星放送のサービスもスタートしました。また標準画質のアナログ放送から高画質のデジタルハイビジョン放送へと進化もし、また画角も4:3のブラウン管テレビから16:9のフラットパネルに進化してきました。

制作現場を離れたこの20年間もメディア戦略を担う立場でテレビに向き合い、今私たちは2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向け世界でも最先端の4K・8Kと言われる超高精細な放送サービスの高度化に向き合っています。

振り返ってみると私のテレビ生活50年は、急激に進む放送の技術革新に振り回され悪戦苦闘しながらも、その新しい技術の成果を取り入れ、番組・コンテンツを作り、放送文化を担ってきた歴史と言えます。

ところが今テレビを取り巻く状況は、通信の世界から動画配信という新しいメディアの出現により、更なる変革を迫られています。ここ2～3年海外からNetflixやAmazon, Huluなどさまざまな形態の配信サービスが一斉に提供され始め、放送と配信で限られた視聴時間を奪い合う構図が生まれつつあります。しかも視聴者の視聴形態がファミリー視聴からパーソナル視聴へと変化、とりわけ若い世代では据え置きテレビからモバイル系のスマホやタブレットとその視聴端末も変わってきています。

こうした動画配信の大きなうねりの中、NHKは次の時代に向け放送のライブ配信の実験を始め、民放キー5局はTVerという無料広告型の見逃し番組配信サービスをはじめました。また私のいるWOWOWでは会員向けVODサービスとして、「見逃し」、「ライブ」、「アーカイブス」と三つの配信サービスも実施しています。

ただこうしたテクノロジーの発展により、お客さまの視聴スタイルが大きく変貌を遂げるテレビの世界にあっても、変わらないものがあります。それはコンテンツの力です。

30年以上前に私が作ったNHK特集『シルクロード』は、今でも魅力的な放送コンテンツです。動画配信の強力なアーカイブ作品です。また有料放送の視点で言えば、それはお金を払ってでも見る価値がある番組、他とは差別化されたコンテンツは変わらず魅力的でこれからも力を持ち続けるでしょう。

もう少し具体的に話をすると、NHKや民放という強力なライバルがいる中で、また動画配信という新しい手段が登場した中で、有料放送WOWOWのオリジナルドラマがなぜ注目を集め輝いてきたかと言えば、まさに変わらず上質にこだわりコンテンツを展開し続けてきたからと言えます。

寸言

実話に基づく大企業のリコール隠しを扱った連続ドラマW『空飛ぶタイヤ』は、テレビ界の様々な賞を受賞しました。また性同一性障害を扱ったホームドラマ『ママは昔パパだった』、子供の臓器移植の法律改正が検討されているときに企画した『CO 移植コーディネーター』、食品偽装を扱った『震える牛』など、いずれの連続ドラマも、時代と向き合い絶えず半歩先を見つめた番組は、テレビであれ配信であれ変わることなく視聴者の支持を得られると信じています。

いま私たちは2020年の東京五輪・パラリンピックに向け放送サービスの高度化、動画配信の展開と新たな挑戦を始めていますが、一方で上質な番組の企画・制作がいかに重要か、変わらぬものの大切さを再確認しています。



NHK 特集 シルクロード



連続ドラマ W 空飛ぶタイヤ

30年前も今も上質なコンテンツの価値は変わらない。

(わざき のぶや 株式会社WOWOW代表取締役会長 昭和43年教育学部卒業)

[目次に戻る ↗](#)

随 想

タイでの研究立ち上げ

名誉教授 吉川 潔



大学を退任した翌年から、タイの友人が学長を務めるチェンマイにあるラジャマンガラ工科大学ラーナ校(RMUTL)で新規研究の立ち上げに着手しすでに2年近くになります。研究のテーマを何にするか?が最初の難題で、私の専門である核融合工学というわけにはいかず、結局以下に述べるような理由から日本の先端的技術である「高電圧・プラズマ及びマイクロナノバブル技術の農業・漁業への応用」としました。

タイ訪問はすでに16年になりますが、「どうしてタイの社会は不安定なのか?」がなかなか理解できませんでした。色々調べた結果、農村に住む人たちは現在人口の6割強で、そのうち15歳以上65歳以下の全労働力人口のうち、農業従事者は4割を占めるということが分かりました。しかしながら、農業従事者一人あたりのGDPは全国平均の1/4程度しかなく、日本同様激減している若い農業世代を再度農業に呼び戻すためにも、現在の収入を大きく改善させ、もって社会の安定化を図る必要があるのではないか、そのためには、先端技術による農業従事者の収入増加を実現することが喫緊の課題ではないか、と考えたわけです。幸い、RMUTLはタイ中央部から北部のいずれも農業、漁業(陸上養殖)が盛んな地域にある離散した6つのキャンパスからなり、農学、工学が比較的充実した大学でもあります。

しかし、タイ農業の現状は、灌漑施設の普及度も低く天水に頼る農業が大きな割合を占めており、温暖化による気候変動の影響をもろに受けているというのが実情で、さらに36年前のhaあたりの生産量は2トンだったものが、現在もわずか3トン程度にしか増えておらず、36年前は同じ収量だった新興国のベトナムは、2トンから現在6トン近い値となっており、タイ米の国際競争力は大きく低下しています。一方、日本の農業人口は1960年の1200万人から現在200万人を切る人数となっていますが、一人あたりの生産量は7.1倍に増加しており、10年ほど前の農産物価格統計では、中国、アメリカ、インド、ブラジルに次いで5番目に位置しています。これは様々な品種改良や先進的管理、新規技術開発の成果と考えられますが、タイでは学術的に興味深く、かつタイ農業にインパクトのある技術を開発・普及させるため、以下に示す内容の2つの先端的技術を選びました。

Wikipediaによれば、「雷などの空中放電により空気中の窒素と酸素が反応して窒素酸化物が生成(窒素固定)され(中略)植物が栄養分として利用でき、落雷した水田では収穫量が増える。同様に落雷したほだ木ではきのこの収穫量が増え(中略)、人工的に交流の高電圧パルスを与えたほだ木での栽培実験では、収量が2～3倍になった事が報告されている」とあります。そこで、現在、岩手大学などからの協力を得て、「水中における上昇空気泡内での高圧放電(超小型人工雷)による窒素固定とヒドロキシルラジカルを含む水の生成」技術を取り入れ、水耕栽培で、この水による栄養分供給とバクテリア滅菌実験を行っています。さらに、日本から導入した高圧パルス電源により、椎茸増産の屋外実地試験を2カ所で行っていますが、特に、タイでは高価な椎茸について、タイと日本では種類や気候が異なるので、最適条件の探索に主眼を置いています。

もう一つのマイクロナノバブル技術は、既にご存じの方も多いと思いますが、久々の大型革

随 想

新技術で、農業、漁業、工学のみならず、最近はがん治療などへの基礎的研究が進んでおり、日本で研究がもっとも盛んに行われています。RMUTLでも様々な応用の研究を始めていますが、特に緊急性の高い食品安全、具体例としては、すでに日本で使用されている、窒素マイクロナノバブルによる低酸素水（好気性細菌の活動が抑制され、鮮度が長期間保てる）の生成装置を開発しています。高温のタイでは魚の保存にがんリスクの大きい化学物質が用いられていますが、この低酸素水の使用により魚の鮮度を安全かつ長期間保持できます。これをタイ国内に一気に普及させるため、現在、極めて低価格、かつコピーが容易な装置をRMUTLで開発中で、この技術によりタイの人たちが早急に安全、かつおいしい魚が食べられるようになればと願っています。

まだ、研究は緒に就いたばかりですが、タイにおける研究で強く感じたことは、京大での研究環境が如何に恵まれていたかということです。まず、私どもが必要とする工業製品の種類が少なく、特殊部品の調達は輸入のため数ヶ月かかることはざらです。そこで、京大で開発した成果を迅速に再現するため、昨夏トランクに51kgのパーツ類を詰め込みチエンマイにまで持参したことがあります。当然、税関で検査を受けましたが、きちんと説明した結果理解が得られ、それ以降は税関員から「タイ国のために働いてくれてありがとう」という感謝の言葉をいただいております。さらにやる気が出ている状況です。

京大では多くの方々がこれまでタイの研究者と多岐にわたる共同研究を実施され、タイ、並びにタイ人気質について相当な知識をお持ちのことと思います。チエンマイでは「中庸の人生 (moderate life)」が最上の人生目標とされ、日本人があこがれるslow lifeを日々実践されています。そのようなRMUTLの先生方に、如何にして“研究意欲の火”をつけるか?が現在私にとっての最大の課題です。先輩諸氏から是非ともアドバイスをいただければ幸いです。

(よしかわ きよし 平成19年退職 元エネルギー理工学研究所教授 専門は核融合工学)

[目次に戻る ↗](#)

洛 書

マスキャンプ

永持 仁



将棋盤の 9×9 個あるマス目の好きなところに飛車をひとつ置き、これを縦と横方向のみで動かして移動させる。どのマス目をも1回は通過させるための最小手数は幾つであろうか。例えば、右上隅に置き、一段ずつ下げながら左右に端までジグザグに移動させれば、17手ですべて通過させられる。しかし16手の動きで全マス目を通過させるのは不可能に感じるであろう。さて、どうしたらこれを厳密に説明できるであろうか？ 小生、訳があつて他にも、「元のマス目に戻る」、「対角線上のマス目だけは、通過する」、「チェスのクイーンのように斜めの動きも許す」などの変種版を考案し、 $n \times n$ の盤（整数 $n \geq 2$ ）上でのこれらの最小手数について考察してきた。平成27年12月にマスキャンプと称した、大阪府下の中高生を対象とする二泊三日の数学合宿が京都の聖護院にある旅館で行われ、ここで講演する機会があった。実はマスキャンプ (math-camp) は、オーストラリアにおいて2009年から毎年開催されている有志による数学教育事業であり、豪州国内の中学、高校の生徒や教員が砂漠の真ん中の施設に泊まり込み、数学について楽しく学び、友情を深めることを目的としている。このキャンプに参加された大手前高校の教員が帰国後、体験をもとに同校のSSH事業の一環として第一回日本版マスキャンプが開催されることになった次第である。有志の中心人物であるチャールズダーウィン大学の数学者Roberts名誉教授の他、米国の大学教員も来日して、この日本版マスキャンプの活動に貢献している。彼らは日本語を使わないので、参加した生徒達は目新しい数学の話題にネイティブの英語で接することになる。友人でもあるRoberts教授から協力を求められた際、提供する話題の選択について考えた。中学生から高校生までが参加者であるので、問題の趣旨が分かりやすく、特別な数学の知識を用いないもの。その点、マス目の並んだ盤面は子供達には馴染み易いであろう。ただ流行りの数独のように、完成した姿自体が問題の解けたことを意味し、完成形を得る方法を問わないのでは気分転換のパズルに終わってしまう。そこで、冒頭に述べた盤面上のルーティング問題を作って提供することにしたのである。マスキャンプには数学オリンピック出場を目指す子も参加しており、提供した問題には一般の中高生には難易度の高いと思われるものも含めてある。解けなかった問題があったとしても、スルメを噛むように時間をかけて解答の理解に取り組んでももらえれば嬉しい。中学、高校での化学や物理は、実験を通じて不思議な現象を体験できる科目である。数学でもそういう体験がさせられないものかと、今度は、畳パズルと座布団パズルなるものを作ってみた。適当な大きさのマス目の盤からいくつかのマス目を取り除いた盤面を「床」と呼ぶとする。図1は床の例である。この例のように穴が開いていてもよい。畳パズルは、与えられた床の内部に 1×2 の長方形の畳を重ねなく、できるだけ数多く置けという問題である。各長方形は縦横どちら向きに置いてもよい。試しに、図1の床に置き方のルールに従って畳型長方形を置いた

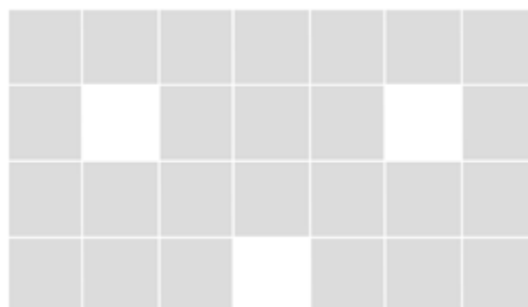


図1 25個のマス目からなる床

洛 書

様子を図2に示す。いや、もっとたくさん置ける!と思われるに違いない。是非そういう配置を探して頂きたい。一方、座布団パズルは、床の上に、 1×1 の正方形の座布団をできるだけ数少ない枚数置いて、座布団の置けなかったどの二つのマス目も縦や横で並ばないようにせよという問題である。やはりこれも試しに、図1の床に置き方のルールを守って座布団を配した様子を図3に示す。ルール通り、どの二つの空きマス目も縦や横で隣り合っていないが、この配置は直せば、まだ座布団の枚数を減らせそうである。マス目が20個程度の床なら、両パズルの「正しそうな答え」は多少の試行錯誤で容易に見つかるであろう。そのとき、同じ床であれば、置いた畳の数と座布団の数がピッタリと一致する。マス目のどれだけ多い床をもってきても両者の数が合致するという現象は変わらない。言い換えると、両者の数が違っている間は、まだどちらかの配置を直して畳を追加できるか、座布団を除くことができるのである。この現象の種明かしは子供達には少し難しく、詳しくは説明しないので、このパズルは暫く不思議のままとなろう。さて、関係者の尽力により第二回日本版マスキャンプが平成28年12月に再び聖護院で開催される運びとなった。寒い冬の京都に数学やパズルに目を輝かせてやってくる子供達とまた会えるのが楽しみである。

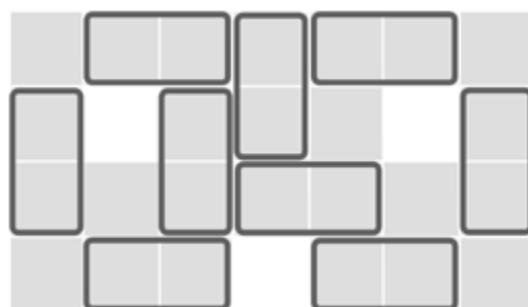


図2 畳型長方形が9枚置けた様子

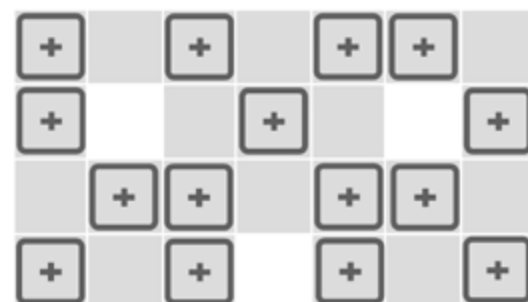


図3 座布団が15枚置けた様子

(ながもち ひろし 大学院情報学研究科教授 専門は離散最適化)

[目次に戻る ↗](#)

栄
誉

稲葉カヨ 理事・副学長が紫綬褒章を受章

このたび、免疫学研究における優れた業績により、稲葉カヨ 理事・副学長が平成28年11月3日(木)に紫綬褒章を受章されました。以下に同理事・副学長の略歴、業績等を紹介します。

稲葉カヨ 理事・副学長は、昭和48年3月奈良女子大学理学部を卒業し、同50年3月京都大学大学院理学研究科修士課程を修了、同53年3月同大学大学院理学研究科博士課程を修了し理学博士の学位を授与されました。

その後、昭和53年4月京都大学理学部研修員、同53年6月同大学理学部助手、平成4年10月同大学理学部助教授、同7年4月同大学大学院理学研究科助教授、同11年4月同大学大学院生命科学研究科教授となり、加えて、平成15年4月より同17年3月まで京都大学大学院生命科学研究科長、同20年9月5日より同26年3月まで同大学女性研究者支援センター長、同20年11月より同24年9月まで同大学理事補、同25年8月より同26年9月まで同大学副学長を歴任し、平成26年10月より同大学・理事・副学長(男女共同参画・国際・広報担当)の任に就き現在に至っています。

また、この間、文部科学省研究振興局科学技術・学術審議会専門委員、同省研究振興局特定領域研究審査会審査委員、同省科学技術・学術政策局科学技術・学術審議会臨時委員、日本学術会議連携会員を歴任し、さらに特定非営利活動法人日本免疫学会理事・同学会会長・同学会評議員、日本樹状細胞研究会常任幹事(副理事長・国際交流担当)、財団法人放射線影響研究所(平成26年4月より公益財団法人放射線影響研究所)顧問、公益財団法人山田科学振興財団評議員、一般社団法人国際統合医学会(平成24年5月より一般社団法人国際個別化医療学会)顧問などの要職を務めるなど、我が国の学術・研究振興に多大な貢献をしました。

同理事・副学長は、永年にわたって、免疫学の教育・研究に努めてきました。とりわけ、樹状細胞の抗原提示・T細胞活性化機能の発見、生体内樹状細胞の機能とサブセットの存在、in vitro における樹状細胞の分化誘導とそれを用いた癌や感染に対する細胞療法への展開といった樹状細胞の研究において数々の業績を挙げました。

これらの業績に対し、ロレアル-ユネスコ女性科学賞を平成26年3月に受賞し、国内では同26年12月に日本免疫学会女性免疫研究者賞を、同27年11月に武田医学賞を受賞しています。

以上のように、同理事・副学長が免疫学の教育・研究活動等を通じて学術の発展に寄与した功績は誠に顕著です。今回の紫綬褒章受章は同理事・副学長のその功績が高く評価されたものであり、誠に喜ばしいことです。

(総務部(秘書室))

[目次に戻る](#)



栄誉

齋藤通紀 医学研究科教授が武田医学賞を受賞

このたび、齋藤通紀 医学研究科教授が武田医学賞を受賞されました。贈呈式は平成28年11月14日（月）にホテルオークラ東京にて執り行われました。

齋藤教授の受賞テーマは「生殖細胞の発生機構の解明とその試験管内再構成」で、以下の研究成果を挙げたことに對するものです。

1. マウス始原生殖細胞に発現する遺伝子群を次々に同定し、その機能を解明、生殖細胞形成過程の分子制御モデルを提唱
2. マウスES細胞やiPS細胞などの多能性幹細胞から始原生殖細胞様細胞を誘導し、それらから精子、卵子、健全な産仔を作成することに成功
3. 上述の実験系に基づき、生殖細胞の転写制御機構やエピゲノム動態の詳細を解明
4. ヒトiPS細胞からヒト始原生殖細胞様細胞を誘導することに成功し、ヒトとマウスの生殖細胞形成機構の共通点と相違点を解明

なお、これらの成果は、生殖細胞の発生機構に関する様々なコンセプトを提唱するのみならず、不妊やエピゲノム異常症の原因究明に結びつくことが期待されます。

（大学院医学研究科）

[目次に戻る ↗](#)



平成28年度医学教育等関係業務功労者の表彰

文部科学省は、医学または歯学に関する教育・研究もしくは患者診療等の業務に関し、顕著な功労のあった方々を対象に毎年表彰を行っています。平成28年度医学教育等関係業務功労者の表彰式が平成28年11月22日（火）に行われ、足立みなみ 医学部附属病院検査部主任臨床検査技師が文部科学大臣表彰を受けられました。

同氏は、41年余の長期にわたり診療支援や臨床検査の発展に積極的に力を注ぎ、また職員や学生の教育にも大きく貢献してこられました。特に、外来採血室や尿検査室の業務改善に尽力し、若手臨床検査技師の育成・教育に貢献し、国際臨床検査室認定取得にも積極的な活動を行ってこられました。

（医学部附属病院）

[目次に戻る ↗](#)



話題

平成 28 年度総長杯ボウリング大会を開催

平成28年11月25日（金）午後6時30分からROUND1 京都河原町店において、平成28年度総長杯ボウリング大会が開催され、48チームが参加しました。会場は、投球ごとに歓声があがり、ストライクも続出し、おおいに盛り上がった大会となりました。

大会結果は次のとおりです。

<団体>

優勝：理学研究科「温子の部屋」チーム（1,176ピン）

市川温子，平野倫子，中家 剛，柴原康夫

準優勝：施設部「施設さん」チーム（1,151ピン）

加藤圭治，大坂正敏，福本翔太，清原丈博

<個人>

男性 優勝：櫻井恒正（吉田南構内共通事務部）（397ピン）

女性 優勝：市川温子（理学研究科）（341ピン）



優勝の理学研究科「温子の部屋」チーム・個人優勝（女子の部）市川温子さん（一番右）



準優勝の施設部「施設さん」チーム



個人優勝（男性の部） 櫻井恒正さん（一番左）

（総務部（人事課））

[目次に戻る ↗](#)

能楽鑑賞会を開催

第60回京都大学能楽鑑賞会を、平成28年12月14日（水）に京都市左京区の京都観世会館で開催しました。本会は、創立記念行事音楽会とともに本学学生・教職員のための課外教養行事として毎年開催しているものです。



狂言「昆布売」



能「井筒」

話題

今回の演目は、狂言「昆布売（こぶうり）」と能「井筒（いづつ）」で、会場には毎年心待ちにされている方や初めて鑑賞される方など多くの来場者が訪れました。狂言の「昆布売」では昆布の行商人と武士の立場逆転が表現されている場面で笑いが起こり、能の「井筒」では秋の古寺を背景に女の恋心をしみじみと描き出す物語に、鼓や笛の音も相まって会場全体が舞台に引き込まれている様子でした。

本会を一つの契機に、特に学生の皆さんが日本の伝統芸能・文化への興味と関心を一層深めていただければ幸いです。

（教育推進・学生支援部（厚生課））

[目次に戻る ↗](#)

平成 28 年度「京都大学体育会スポーツ表彰」授与式を举行

ホテル平安の森において平成 28 年 12 月 17 日（土）に、京都大学体育会によるスポーツ表彰授与式が举行されました。

このスポーツ表彰は、京都大学体育会規約にある「本会は、京都大学における体育の向上、運動の普及を図り、あわせて本学学生の心身の錬磨、品性の陶冶に資し、もって学徳兼備にして有為の人材を作することを目的とする。」という理念を実践し、それにふさわしい貢献をした部員を表彰するものとして、平成 19 年度に設立され、今回で 10 回目の開催となりました。

本表彰では、優秀な成績を残した選手はもちろんのこと、大学から新しいスポーツを始め、実力を大きく向上させた選手、裏方として部を支えた選手・マネージャーも対象としています。

今回は体育会会長賞 10 名、優秀賞 5 名の計 15 名が守屋和幸体育会会長より表彰を受け、受賞者の皆さんは晴れやかな様子で壇上に上がっていました。

体育会会長賞（10 名）		
佐々木雄矢	ささき ゆうや	アメリカンフットボール部
大西 恒尚	おおにし つねなお	ウィンドサーフィン部
阿知波宏明	あちわ ひろあき	ウィンドサーフィン部
山本 尚輝	やもと なおき	フェンシング部
上垣 慎	うえがき しん	カヌー部
手束 祥子	てづか しょうこ	少林寺拳法部
松村 眞吾	まつむら しんご	少林寺拳法部
鶴見 侑大	つるみ ゆうだい	馬術部
松本 美紀	まつもと みき	女子バスケットボール部
森川 将光	もりかわ まさみつ	ボート部
体育会優秀賞（5 名）		
佐々木郁美	ささき いくみ	アメリカンフットボール部
河野 幹志	かわの もとし	アメリカンフットボール部
渡邊 陽介	わたなべ ようすけ	剣道部
山田 尚輝	やまだ なおき	水泳部
岡野 颯斗	おかの はやと	陸上競技部



表彰者集合写真

（教育推進・学生支援部（厚生課））

[目次に戻る ↗](#)

話題

本学学生が平成 28 年度「京都市スポーツ賞」を受賞

平成 28 年 12 月 26 日（月）午後、ロームシアター京都サウスホール（京都市左京区）において、「京都市スポーツ賞」表彰式が行われ、本学体育会陸上競技部所属の山西利和さん（工学部 3 回生）が、男子 10000 m 競歩での全国優勝により、「京都市スポーツ大賞」を受賞されました。

京都市では、スポーツの分野において、スポーツに対する市民の関心を高め、競技力の向上および市民スポーツの振興等に顕著な業績のあった方に対し、その栄誉を称えるため、「京都市スポーツ賞」を贈呈し、表彰式を行っています。

また、今回は本学卒業生でリオデジャネイロオリンピック 7 人制ラグビー女子日本代表の竹内亜弥さん（アルカス熊谷）も「京都市スポーツ特別賞」を受賞されました。

【記録】

天皇賜杯 第 85 回日本学生陸上競技対校選手権大会

男子 10000 m 競歩 優勝 山西利和（工学部 3 回生）

記録：40 分 38 秒 01



表彰者集合写真



京都市スポーツ賞を受賞された
山西さん（右）と竹内さん（左）

（教育推進・学生支援部（厚生課））

[目次に戻る ↗](#)

タイ王国王女が医学研究科を訪問

平成 28 年 11 月 28 日（月）、タイ王国のチュラポーン王女殿下が医学研究科を訪問されました。

芝蘭会館山内ホールにて、上本伸二 医学研究科長、稲垣暢也 医学部附属病院院長より歓迎のご挨拶の後、タイ王国に新たに設立された HRH Princess chulabhorn College of Medical Science が



意見交換後、山内ホールにて集合写真

重点的に力を入れている分野について、本学の医学研究科教員がプレゼンテーションを行い、意見が交わされました。

また最後には、記念品交換、記念撮影が行われました。

（医学・病院構内共通事務部）

[目次に戻る ↗](#)

話題

宇治キャンパスで総合防災訓練を実施

宇治キャンパスでは平成28年10月31日(月)に、宇治市東消防署の協力のもとに、宇治市で震度6弱の地震(南海トラフ地震)が発生したことを想定した、総合防災訓練が行われました。

これは京都大学危機管理計画(地震編)に対応する訓練に、地震時の安否確認・情報伝達の要素を加え、負傷者や火災の発生等、現実的な想定のもと、組織的な避難誘導・情報伝達を総合的にシミュレーションするものとなっています。教職員で組織する自衛消防地区隊を中心に、その他の教職員、学生などキャンパス全体で総勢1,000名以上が参加し、初期消火や安否情報伝達、避難誘導、負傷者の救護、また避難状況の集計等、様々な場面が設定され、参加者は、各自の役割を確認しながら実践しました。

避難訓練後は、宇治市東消防署の指導による消火器操作訓練も行い、参加者は熱心に説明を聞き、実際に消火器を手にとって体験しました。

また、宇治市東消防署による煙中体験訓練を行いました。参加者は煙の中での避難行動の難しさを体験しました。

訓練終了後には、宇治地区世話部局長 渡邊隆司 生存圏研究所長の挨拶、橋本幸夫 宇治市東消防署予防消防課長からの講評の後、消防署の方と自衛消防地区隊を中心とした参加者との意見交換も行われ、盛況のうちに終了しました。



世話部局長 渡邊生存圏研究所長による挨拶 橋本宇治市東消防署予防消防課長による講評の様子



安否情報を集計する対策本部の様子



消火器操作訓練



煙中体験訓練



避難訓練の様子

(宇治地区事務部)

[目次に戻る](#)

話題

宇治キャンパスで安全衛生講習会を開催

宇治キャンパスでは平成28年11月10日(木)、宇治事業場衛生委員会主催ならびに宇治地区総合環境安全管理センター共催による安全衛生講習会を開催しました。

この講習会は、宇治地区の教職員や大学院生等を対象に「年間安全衛生管理計画」の一環として開催しているもので、今回は、今中美栄 京都光華女子大学健康科学部管理栄養士学科長を講師に迎え、「知ってるとお得な「食情報」！～食事の選び方と健康管理～」をテーマに講演いただきました。

講演では、日ごろの食事の大切さや食事による栄養摂取のコツなどについて、学生や研究者を具体例に挙げ詳細に解説いただきました。

参加者は興味深い内容に熱心に聞き入り、盛会のうちに終了しました。



吉村 剛 宇治事業場衛生委員会委員長による挨拶



講演を行う今中講師

(宇治地区事務部)

[目次に戻る](#)

宇治キャンパスでリサイクルフェア・交流会を開催

宇治キャンパスにおいて、外国人研究者・留学生に対する支援の一環として、平成28年11月1日(火)にリサイクルフェアを開催しました。

宇治地区関係者から家庭に眠っている遊休品の提供を受け、無償で外国人研究者・留学生に提供するリサイクルフェアの開催は今年で11回目、例年と同様、外国人研究者・留学生と教職員との交流会も同時開催しました。

リサイクルフェア会場となった、宇治おうばくプラザ ハイブリッドスペースでは、関係者の協力により集まった約680点の物品が並べられ、研究者、留学生や、その家族など64名の来場者がありました。毎年大人気のこの催しは、組み立て式の家具から電化製品、布団類、衣服、食器や鍋といった日常用品、子供用雑貨やおもちゃなど様々な物が出品され、単身者にも家族連れにも喜ばれています。

リサイクルフェア会場隣の交流会会場では、参加者はお茶を片手に和やかな雰囲気の中、お互いの交流を深めました。

また、交流会コアタイムには、宇治地区研究所の所長等も参加し、渡邊隆司 生存圏研究所長の挨拶の後、西上欽也 防災研究所副所長、青山卓史 化学研究所副所長の紹介



リサイクルフェア会場



生存圏研究所 渡邊所長の挨拶

話題



抽選会景品授与

と挨拶がありました。その後、参加者の自己紹介タイムが設けられ、引き続き行われた電化製品等の抽選会で会場は大いに盛り上がりました。

宇治キャンパスでは、外国人研究者約500名(年間)、外国人留学生約130名が研究のために来訪、滞在しており、今後もこういった生活支援事業を続けていく予定です。

(宇治地区事務部)

[目次に戻る ↗](#)

平成 28 年度 桂キャンパス防災訓練および防火訓練を実施

平成28年11月11日(金)西京消防署の指導のもと、桂キャンパス防災訓練および防火訓練をCクラスターにて実施しました。

防災訓練は、京都府南部で震度5強の地震が発生し、C3棟で火災やけが人、建物被害があったとの想定で実施し、自衛消防隊、教職員、学生など約200名が参加し、それぞれの役割に応じて迅速に対応しました。

さらに、研究室では、身の安全の確保、消火器による初期消火および119通報、地震時の初動体制や避難行動の訓練を実施しました。

引き続き行われた防火訓練では、消火器訓練の説明を受け、約60名の参加者全員が、実際に消火器を使った初期消火の手順を確認しました。

桂キャンパスでは、日々防火・防災意識を高めるとともに、火災・災害発生時に教職員や学生が迅速かつ的確な行動ができるよう、今後も訓練を実施していきます。



避難誘導班(避難経路の検討)



救出救護班(けが人救助)



実験室での初期消火



建物からの避難



消火器操作説明



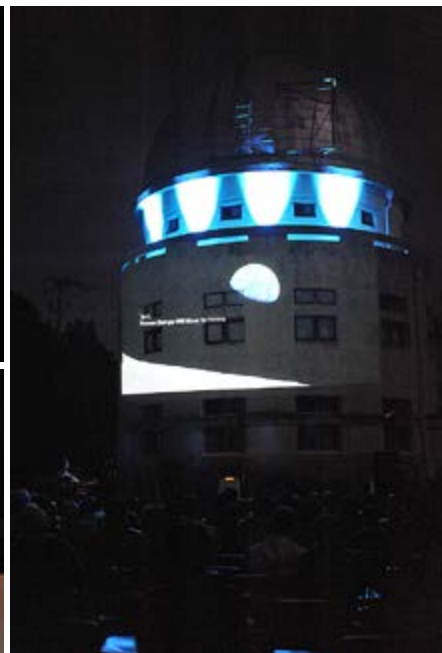
消火器使用訓練

(桂地区(工学研究科)事務部)

[目次に戻る ↗](#)

話題

第4回花山天文台野外コンサートを開催



(写真上) 映像ライブコンサートの様子
(写真左上) 喜多郎氏の演奏
(写真左下) 三上氏の舞踊

平成28年10月15日(土)、世界的な音楽家である喜多郎氏を招いて、第4回花山天文台野外コンサートを開催しました。

花山天文台は昭和4(1929)年の創設以来、太陽系や太陽観測で世界的な成果を生み出すだけでなく、「アマチュア天文学の聖地」として天文学の教育普及に関しても重要な役割を果たしてきました。しかしながら、近年は建物や望遠鏡の老朽化や昨今の国立大学の予算削減等により、存続の危機を迎えていました。このような状況の中、平成25(2013)年に同天文台が、京都市の「市民が残したいと思う『京都を彩る建物や庭園』」に選定されました。これを記念し、花山天文台の存続を応援することを目的とした花山天文台野外コンサートが毎年開催されるようになりました。

同コンサートは、花山天文台の危機を知った喜多郎氏の応援もあって開催されているもので、第4回となる今回は、同氏の発案により、京都府教育委員会と京都市教育委員会の協力のもと、京都府下の高校生が多数招待されました。当日は、素晴らしい秋晴れの満月のもと、約300人の参加者が世界初の「古事記と宇宙」映像ライブコンサートを楽しみました。

「古事記と宇宙」とは、喜多郎氏の楽曲「古事記」に合わせて宇宙のさまざまな映像・画像を同時上映するという映像コンテンツで、柴田一成 花山天文台長の発案と喜多郎氏とのコラボレーションのもと、花山天文台と学術情報メディアセンターとの学内共同研究成果として2015年8月に完成したもので、芸術作品としてだけでなく、全編を鑑賞すると天文学入門になるように映像や画像が選ばれています。2016年には英語版DVDとライブコンサート用バージョンが完成し、同コンサートで初めての披露となりました。また、



コンサート最後の集合写真(左より柴田天文台長、喜多郎氏、門川市長、三上氏、土井特定教授)

話題

舞踏家の三上賀代氏が、喜多郎氏の演奏に合わせて素晴らしい舞踏を披露されました。

コンサートの冒頭には、橋本幸三 京都府教育次長（知事代理）、清水稔之 京都市教育企画監（市長代理）の祝辞があり、コンサートの最後には、ご多忙の中かけつけてくださった門川大作 京都市長の挨拶がありました。他にも宇宙飛行士である土井隆雄 学際融合教育研究推進センター(宇宙総合学研究ユニット) 特定教授も登場し、応援コメントを寄せました。これには、招待されていた京都府下の高校生たちも大喜びでした。

（大学院理学研究科）

[目次に戻る](#)

平成 28 年度京大関係病院長協議会定例総会を開催

京都大学医学部附属病院は、去る平成 28 年 9 月 23 日（金）に平成 28 年度京大関係病院長協議会定例総会を芝蘭会館にて開催しました。本協議会は、同会員である関係病院長が親睦を深めるとともに、医学の進歩発達および病院経営の合理化を企画することを目的として年一回、定例総会を開催しているもので、学内外から 150 名余りが参加しました。

定例総会では、稲垣暢也 医学部附属病院長および岩井一宏 医学研究科副研究科長の開会挨拶、稲垣病院長より「京大病院の現状」についての報告、妹尾 浩 教授（消化器内科長）、南部雅幸 特定教授（先制医療・生活習慣病研究センター）、湊谷謙司 教授（心臓血管外科長）、佐賀恒夫 特定教授（放射線診断科）より新任者挨拶と研究・診療科等の紹介、福原俊一 教授（医学部附属病院臨床研究教育・研修部部長／医学研究科医療疫学分野）より医療者のための臨床研究オンライン学習プログラム（CLiP Extension）についての報告、小西靖彦 教授（医学研究科附属医学教育推進センター長）より臨床実習について報告が行われました。

続いて、新専門医制度について、高橋良輔 教授（神経内科長）、松村謙臣 准教授（産科婦人科長）、大森孝一 教授（耳鼻咽喉科・頭頸部外科長）からそれぞれ報告が行われました。その後、松田秀一 教授（副病院長／整形外科長）がコーディネーターとなり、パネルディスカッションを実施しました。パネリストは、新専門医制度の報告者 3 名に加え、稲垣病院長が加わり、新専門医制度の現状と課題について議論が繰り広げられました。さらに質疑応答では、関係病院の先生方との活発な意見交換が行われるなど、充実した定例総会となりました。



開会挨拶を行う稲垣病院長



パネルディスカッションの様子

（医学部附属病院）

[目次に戻る](#)

話題

オープンホスピタル 2016 を開催

京都大学医学部附属病院では、平成28年10月22日(土)に、「京大病院オープンホスピタル2016」を開催しました。このイベントは、将来の医療を担う人材および地域住民など多数の方々に、安全で安心を得られる質の高い医療を提供するため、院内の各部門が実施している活動内容を紹介し、京大病院の魅力を伝えることを目的に平成18(2006)年から毎年開催しているもので、今年で11回目の開催となりました。

当日は、各診療科(部)の取り組みを紹介する「パネル展示」をはじめ、リハビリテーション部の筋力テストや検査部の頸動脈エコー体験、看護部のヘッドマッサージなどの「体験コーナー」、さらに京大病院への就職希望者を対象にした「就職相談コーナー」や「見学ツアー」など様々な企画を実施し、将来医療の道に進みたいと考えている学生さんから近隣住民の方まで、たくさんの方にお越しいただき、各部の取り組みや業務について知っていただくことができました。

また、毎年恒例の、京大職員・学生による混声合唱団「かるがも♪あんさんぶる」ミニコンサートや桂米朝一門による「京大病院寄席」も大変盛り上がり、大盛況のうちにイベントを終えることができました。

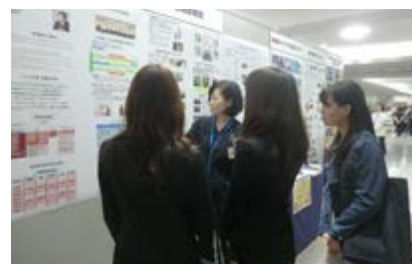
今後もオープンホスピタルを通して、実際に現場で働く職員が自らの声で京大病院の魅力を伝え、たくさんの方々に医学部附属病院の活動を知っていただけるよう努めていきます。



オープンホスピタル当日の院内



手術に使用する器具を説明するスタッフ



看護部の概要を説明する看護師

(医学部附属病院)

[目次に戻る](#)

大学院総合生存学館(思修館)で第5回国際シンポジウムを開催

大学院総合生存学館(思修館)では、平成28年11月21日(月)および22日(火)に、第5回国際シンポジウム「Disasters and Human Survivability: Enhancing Resilience to Risks Threatening the Future of Humanity」を芝蘭会館稲盛ホールで開催しました。

シンポジウムは、11月21日に北野正雄 理事・副学長、続いて川井秀一 総合生存学館長による開会挨拶で始まり、2日間にわたりケンブリッジ大学、マッコーリ大学、一橋大学、本学の教員・研究員による講演等が行われ、宇宙、地震、歴史、病理学、経済学・経営学など通常

話題

一堂に会することがない様々な研究分野の専門家による活発な討論が展開されました。

「A Classification of the Risks Threatening the Future of Humanity」と題した基調講演に始まり、「将来の大災害のリスク」、「過去の大災害の歴史」、「経済学と経営学の観点から見る大災害に対するレジリエンスの強化方法」の3つのテーマに基づいて講演が行われ、2日間の総まとめとして、「人類の未来を脅かすリスクに対するレジリエンスの強化」をテーマとしたパネルディスカッションが行われました。

なお、11月22日に、総合生存学館学生によるポスターセッションの趣旨説明およびポスターセッションが行われました。

当日は、京都大学内外の学生や総合生存学館の学生・教職員など、約100名が出席し、災害と総合生存学について積極的な質疑応答が行われるなど、盛況のうちに終了しました。

【関連リンク】

大学院総合生存学館HP（ニュース）

<https://www.gsais.kyoto-u.ac.jp/blog/2016/11/28/20161121-2>



北野理事による開会挨拶



川井学館長による開会挨拶



基調講演後の質疑応答



学生ポスターセッションの様子



学生一人ひとりが、学生ポスターセッションの趣旨説明



パネルディスカッションの様子



集合写真

（大学院総合生存学館（思修館））

[目次に戻る ↗](#)

話題

タイ王国で学生短期研修を実施

平成28年11月11日(金)から18日(金)の8日間、タイ王国にて学生の短期研修を実施しました。参加者は、地球環境学舎5名、工学研究科環境工学専攻5名、マレーシア・マラヤ大学5名、タイ王国・マヒドン大学5名およびAsian Institute of Technology4名の計24名(日本、マレーシア、タイ王国含む9カ国の学生)でした。それぞれ異なる分野を専門とする学生たちがタイ王国の文化、環境関連の問題点を共有し、自国との相違点や自らの研究の観点から意見を交わし、相互理解を深めました。初日には、藤井滋穂 地球環境学舎教授による開会の挨拶があり、その後、参加者は5つのグループに分かれ、各自の研究をA3サイズのポスターを使い、研究発表と討議を行いました。研修期間中に開催されたInternational Symposium on Global Environmental Studies Education and Research in Asiaにも出席し、ポスタープレゼンテーションで、シンポジウム参加者に研究の内容を伝えることができました。11月16日(水)にはKoh Larnで、下水処理施設等環境関連施設の視察を行い、実務の現場を学ぶことができました。最終日には、研修中に見つけた環境関連問題について、それを解決するための科学技術および大学の役割について、各グループがプレゼンテーションを行い、マヒドン大学教員から賞賛のコメントが出るほどの内容であり、準備のためのグループ内での情報共有および議論が白熱したものであったことが伺えました。今回の参加者の中には、マヒドン大学からの平成27年度および28年度の地球環境学舎特別聴講学生がおり、旧交を温める機会ともなり、また研修中から参加者がSNSでグループを作り、交流をしています。今回の研修が参加者間、大学間の交流の発展につながることを期待されます。



ポスターを使った研究内容の共有



食文化体験と交流



シンポジウムでのポスター発表



参加者間の交流



環境関連施設の視察



グループによる成果発表

(大学院地球環境学舎)

[目次に戻る](#)

話題

京都大学およびタイ王国マヒドン大学主催「アジア諸国に展開する地球環境学の教育・研究連携に関する国際シンポジウム」を開催

概算要求機能強化経費「海外サテライト形成によるASEAN横断型環境・社会イノベーター創出事業」、およびJSPS拠点交流(B)「アジアプラットフォームによる地球環境学の実践的展開と学術研究基盤の創生」の支援により、タイ・マヒドン大学で「アジア諸国に展開する地球環境学の教育・研究連携に関する国際シンポジウム」を開催しました。今回のシンポジウムでは、本学とマヒドン大学の他、アジア・欧米の14ヶ国28大学から研究者や学生、また在タイ日本大使館、JSPSバンコクオフィス、環境関連の日本企業などの関係者も含め、合計185名の参加者が集まりました。

開催日程は3日間で、平成28年11月13日(日)は第11回「インドシナ地域の教育研究連携に関する大学間ワークショップ(於：ノボテルバンコク・サイアムスクエア)」として、プレ・ワークショップを企画し、1. 国際協働教育プログラム開発、2. 国際連携を通じた森里海連環学研究と実践活動の可能性、3. 国際共同研究の進展、4. 産官学連携の推進の4セッションにおいて活発な議論が交わされました。



プレ・ワークショップ

11月14日(月)はメインシンポジウム「アジア諸国に展開する地球環境学の教育・研究連携に関する国際シンポジウム(於：マヒドン大学サラヤキャンパス)」が盛大におこなわれました。

午前のセッションI(アジア諸国に展開する地球環境学の研究連携)では、まず前日のプレ・ワークショップの成果が報告され、その後多数の若手研究者による研究発表と、学生を含むポスター発表が実施されました。本セッションに並行してサテライトイベント・京都大学留学フェアも開催され、日本への留学に興味をもつ多くのタイ人学生が参集しました。

午後のセッションII(アジア諸国に展開する地球環境学の教育連携)では、まず本シンポジウムの主催であるマヒドン大学と京都大学を代表して、Udom Kachintorn マヒドン大学学長、北野正雄 理事・副学長より開会の挨拶が述べられました。これに引き続き、ダブルディグリーのプログラム調印式がおこなわれ、地球環境学堂(舟川晋也 学堂学舎長)はマヒドン大学、ボゴール農業大学と、農学研究科(宮川 恒 農学研究科長)はボゴール農業大学、バンドン工科大学と協定書調印を各々取り交わしました。今後これら3大学と新たな国際教育連携を進めていきます。次に、教育・人材育成における国際連携について、Banchong Mahaisavariya マヒドン大学副学長、北野正雄 理事・副学長、Christa Fittschen リール大学化学部リサーチ・ディレクター、唐木啓介 在タイ日本国大使館一等書記官により、特別講演がおこなわれました。



ダブルディグリー調印式(京都大学・マヒドン大学)

話題

11月15日(火)にはバンコク近郊のマングローブ保全林等のスタディツアーが実施され、3日間に渡るシンポジウムの全日程が終了しました。

本シンポジウムでは、これまで本学が研究教育の連携を進めてきた多数の大学が集まり、開催中の様々なイベントで活発な議論や意見交換がなされ、大変有意義な会合であったと大勢の参加者から聞かれました。平成29年度には主要連携大学の一つであるハノイ理工科大学にて共同開催を予定しており、教育連携の深化や共同研究の促進など逐次議論していく予定で、今後の連携発展が期待できます。



マングローブ保全林のスタディツアー



シンポジウム後の集合写真

(大学院地球環境学堂)

[目次に戻る](#)

首相夫人 安倍昭恵氏を講師に迎え、特別講義「価値の創造」を開催

首相夫人である安倍昭恵氏を講師にお迎えし、平成28年12月21日(水)に特別講義「価値の創造」を開催しました。

安倍氏は日本のファーストレディとして国内外を飛び回る傍ら、公式オフィシャルサイトの冒頭には田んぼに入る写真と「豊かな地球とつながろう」というフレーズを掲げ、農業や環境問題にも実践的に取り組んでいます。地球環境学堂教員や学内団体「エコ〜るど京大」が取り組む海洋資源保全の活動にて本学と縁があり、今回の関係学生向け特別講義が実現しました。

本講義では、安倍氏の「若い方々と対話したい」との想いにお応えし、事前に学生からの「お手紙」を届け、その返信を含めてお話いただくという形をとりました。ご自身の半生を振り返りながら、さまざまな出来事が、結果的にどのような価値(観)や取り組みに繋がってきたかを、一言一言大切に話され、会場は一体感に包まれました。後半の質疑では、次々と出された質問に、



講義される安倍氏



講義後の質疑

話題

冗談も交えて答えてくださいました。

参加者からは、「創り手が価値をいかに創るか提案するかという、今思えば狭い視野で参加したのですが、頭から「新しい価値観をどうやって創っていくか」というお話で、とても刺激になりました。共感するところがとても多く、自省、内省のロールモデルに触れた感じが勝手に持っています。週刊誌ベースでしか知らないのは不幸だとも思いました」、「一つ一つの言葉をご自身から絞り出されていて、とても言葉を大切にされているのが伝わってきました」、「皆が目指すところは、平和な社会をという同じものですから」や「自分のこころの声を大切に」などなど、心に残ることばがいくつもありませんでした」などの感想が寄せられました。多くの参加者にとって、今後の取り組みの勇気やヒントに繋がるものとなりました。

なお、事前の昼食会では、完成を目指す京大総長ブルーシーフードカレーの試食が行われました。浅利美鈴 地球環境学堂准教授進行のもと、舟川晋也 地球環境学堂長や藤井滋穂 三才学林長に加え、内藤正明 初代地球環境学堂長や門川大作 京都市長、若手研究者や学生も参加し、さまざまな意見が飛び交いました。



主催者・関係者



昼食会の様子

(大学院地球環境学堂)

[目次に戻る ↗](#)

化学研究所「第116回研究発表会」を開催

化学研究所は、平成28年12月2日(金)に宇治キャンパス内共同研究棟大セミナー室を主会場として第116回研究発表会を開催しました。午前は、高谷 光 化学研究所准教授、水畑吉行 同助教、脇岡正幸 同助教、齊藤高志 同助教、古田 巧 同准教授らがそれぞれ最先端の研究発表を行いました。午後からは、「京大化研奨励賞・京大化研学生研究賞」の授与式が挙行政され、5名(京大化

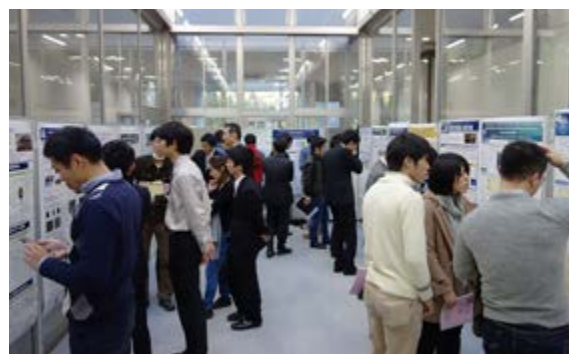


時任所長と受賞者5名

研奨励賞：中村泰之 化学研究所特定准教授・治田充貴 同助教、京大化研学生研究賞：張鋭 工学研究科博士課程3回生[構造有機化学研究領域]・鈴木裕子 理学研究科博士課程2回生[有機元素化学研究領域]・山田琢允 同博士課程1回生[光ナノ量子物性科学研究領域]、

話題

が受賞し、中村特定准教授、張博士課程3回生および鈴木博士課程2回生が受賞講演を行いました。また、共同研究棟ライトコートでは69件のポスター発表が行われました。その後、昨年度の「化研らしい融合的・開拓的研究」に採択された課題7件中3件の口頭発表報告として岩本貴寛 化学研究所助教、加藤真理子 同助教、坂本雅典 同准教授らから成果報告がありました。なお、その他4件はポスター発表として活発な質疑・討論が行われました。本研究発表会は、一般、関連研究機関、所内から延べ150名を越える参加者を得て、最先端の多彩な研究成果がわかりやすく発表されました。また、ポスター発表にも多数の参加者を得て、盛況のうちに終了しました。なお、終了後には化学研究所所属の教職員・大学院生ら多数が参加して、生協会館にて本会の懇親会が行われました。



ポスター発表会場



口頭発表会場

(化学研究所)

[目次に戻る ↗](#)

訃報

このたび、西原宏 名誉教授、堀之内吉成 助教が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に両氏の略歴、業績等を紹介します。

西原 宏 名誉教授

西原宏先生は、平成28年11月15日逝去されました。享年94。

先生は、昭和20年9月京都帝国大学工学部電気工学科を卒業、同23年1月同大学大学院（工学部）を修了し、京都大学工学部講師に採用され、助教授を経て同33年2月同学部教授に昇任、電子工学科自動制御第2講座を担当、その後原子核工学科の創設に伴い原子核機器学講座に担任換えとなりました。この間、昭和28年8月に京都大学より工学博士の学位を授与されました。昭和47年4月京都大学大型計算機センター長、同49年11月同大学評議員、同52年4月同大学工学部長、同59年4月からは附属図書館長を務め、同61年3月停年退職となり、同年4月に京都大学名誉教授の称号を授与されました。



先生は統計的手法を新たに電力工学の分野に取り入れた研究を展開しました。続いて原子炉物理学において中性子輸送方程式の新しい解法を示し、それをもとにして新型原子炉の核特性予測に大きな成果を上げるなど、当該学問分野の体系づくりに貢献しました。また、核融合プラズマ物理学研究のために、小型トカマク装置を新たに設置し、これによりプラズマの特性に関する先駆的な実験を推進しました。講義をもとに著述した「電磁気学大要」は優れた教科書として認められています。

停年退職後、先生は平成元年4月から5年3月まで中部大学教授、同4年4月から株式会社原子力安全システム研究所技術システム研究所長を務めました。また文部省関連の委員、動力炉核燃料開発事業団および日本原子力研究所の各種委員を多数歴任しました。これらの功績により、先生は昭和59年11月産業教育100年記念教育功績者として文部大臣より表彰を受け、また平成9年秋の叙勲において勲二等旭日重光章を授与されました。

(大学院工学研究科)

[目次に戻る](#)

訃報

堀之内 吉成 助教

堀之内吉成先生は、平成28年11月18日逝去されました。享年53。

先生は、昭和60年3月京都大学工学部建築学第二学科を卒業、同62年3月同大学院工学研究科修士課程を修了したのち、同62年4月京都大学工学部助手に採用され、平成19年3月に京都大学博士（工学）の学位を授与されました。平成19年4月より工学研究科都市環境工学専攻助教を経て、同22年4月より同研究科建築学専攻環境構成学講座音環境学分野の助教として職務を果たされました。

先生は長年にわたって建築環境工学の音環境分野で研究され、騒音・振動、室内音響の専門家として活躍され、特に数値計算によるシミュレーションで積分方程式を用いた音場解析の分野において多大な貢献をされました。



（大学院工学研究科）

[目次に戻る ↗](#)